アンノウン・エンジェル ～if～

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アンノウン・エンジェル　～ｉｆ～

【Ｎコード】
Ｎ２６０８Ｂ

【作者名】
雨月

【あらすじ】
とある男性がある、男子高校生にある、依頼を持ち掛ける・・・・
そこから始まる物語の結末は？

一つの終わりから始まる物語（前書き）

雨月が初めて書いた小説のリメイク版のようなものです。少し、暗いかもしれませんが、よろしくお願いします！

一つの終わりから始まる物語

零、

とある、喫茶店。そこでは裏取引が行われていた。サングラスをかけた男と、どこかの高校の制服姿の男子高校生が向かい合って話している。ウェイトレスさんや周りの客は失礼になるかもしれないのでそんな二人を見ていない。

「・・・・・で、君が僕に何か依頼をしたいといった人ですね？」

「・・・ええ、あなたなら報酬さえ支払えばなんでもしてくれると聞いていますからね。・・・・その噂は本当でしょうか？」

サングラスをかけている男は運ばれてきたブラックコーヒー（本日三十杯目）を一気飲みする。彼はこの男子高校生が来る数時間前からこの喫茶店に陣取っていた。（開業時間にやってきた。ちなみに今は夕方である。）そして、飲み終えたブラックコーヒーのカップを静かにテーブルの上に置き、男子高校生をそのサングラスから覗く優しそうな目で眺める。

「・・・・・確かに、僕は報酬さえもらえばなんでもしますよ。しかし・・・・まずは依頼をいってもらわないと困りますね。」

男子高校生は先ほどやってきたレモンティーに手をつけ、優雅に飲み干す。その姿はどこかの御曹司を思い起こさせる。

「・・・・だが、噂では二人君たちはいたと聞いていたが？なんでも、君が依頼をその相方に伝えて相方が任務として解決するらしいといっていたと思うが？」

男子高校生はふっと笑い、肩をすくめる。

「ええ、確かに昔は二人でしたが、事情があって相方は家庭を持ってましてね。どこかの王様になって今頃忙しいんですよ。全く、どこぞの愛妻家みたいでですね、たまに会ったら奥さんの写真を嫌というほど見せ付けてその後はこの前生まれたらしい子どもの写真をこれまた嫌というほど見せ付けてくるぐらいなんですよ。でもですねぇ、これも一つの終わり方、もしかしたら始まりかもしれません。・・・とまぁ、そんなことよりは貴方の依頼ですよ。」

「分かりました。実は、あなたにこの世界を滅ぼした後・・・・再び、再生してもらいたいんですよ。」

男子高校生は少しきつい眼差しを相手におくった。

「・・・・理由があるなら教えてください。その理由によっては・・・・まぁ、報酬によって可決するか否決するかは僕が決めます。」

「・・・ええ、理由は簡単です。あなたの・・・元、相方さんはですね、少々、約束を破りすぎているような気がするのですよ。たしかに、あの人の幸せを奪うことになってしまいますが・・・・これも何かの運命と思って欲しいですね。私としては幸せを手に入れるのはきちんと約束を守ったものだけが手に入れるべきと思うのです。」

男子高校生はふぅむと唸った後、相手の隠れている目に視線を飛ばしてみた。

「・・・・報酬は？」

「これです。どうぞ、確認してください。」

とても大事そうな黒塗りのかばんがテーブルの上に置かれ、男子高校生はそれを開けてみる。そして、頷いた。

「・・・・分かりました。それでは・・・・何時、世界を消しますか？」

「ええ、ちょうど、インスタントラーメンが出来る時間までには消してもらいたいと思います。」

サングラスの男は少しほっとしたような感じのため息をつき、前に座っている男子高校生を眺める。その目からは何も感じ取ることは出来なさそうである。男子高校生は自分のかばんの中をごそごそし始め、インスタントラーメンを取り出し、同じようにかばんの中から給水ポットを取り出してテーブルの上にセット。そして、相手を見据えて口を開く。

「・・・・何か遺り残したことは？あっちの世界ではあなたは生まれないかもしれないんですよ？それとも、そっちのほうがいいんでしょうか？」

対するサングラスの男は寂しそうに微笑み、答えた。

「そんなわけないよ、僕は・・・だからね。」

「それもそうだね。失礼！」

男子高校生は笑い、インスタントラーメンにお湯を注いだ。周り

の客はものめずらしそうにそんな二人組を見ている。

「さて、後三分ですよ。」

「ええ、ではこれで私は退出させていただきますよ。・・・・その、鞄の中にあるのは私がとても手に入れるのに苦労したものです。ぜひとも・・・・いや、あなたが粗末にするとは思いませんのでまぁ、確認として大切にしておいてください。」

「分かってます。それでは、お気をつけて・・・・。」

男子高校生はそういってもう一度渡された鞄の中の物を眺めた。

「時雨！早く逃げなって！！」

「うぅ、腰が砕けて逃げれないよぉ～！助けてぇ、千夏姉さん！！」

「ったく、犬が出たからってそんなに騒がないの！男の子は女の子の前で泣いちゃ駄目！分かった？」

「うぅ、だってぇ・・・」

そういう少年のもとにだんだん近づいてくる犬。その顔は人間のような表情があればニヤニヤ笑っているに違いない。セクハラ上司のような感じだ。少年より少し後ろに立っている少し年上の女の子は腰を抜かして何も出来ないでいる少年をまるで旧型量産機に負けた新型専用機を見るような目で見ていた。

「約束して、必ず、女の子の前で涙は見せないって！」

「分かったよ！だからぁ、たすけてぇ！！」

女の子はため息をつき、少年に告げる。

「・・・・ほら、ちょっと目をつぶってて、すぐすむから・・・」

少年は頷き、目をつぶる。少年の視界は闇に包まれる。計りしえない何かが少年の心を不安に落としいれようとしたが（それはもう、素足でウン〇を踏んづけてしまったぐらい不安である。）そんな少年の耳に安心する声が聞こえた。

「・・・時雨、怖がってもいいけど、大丈夫って信じることも大切なの・・・だから、覚えておきなさいよ？」

「うん、絶対覚えておく！！」

少年は自分より一つぐらい年上の女の子が目を開けていいというまで目をあけなかった。そして、少女は犬を追い払い・・・・犬VS少女　開始一分　背負い投げ、一本　勝利者　素絡（すがらみ）　千夏（ちなつ）の勝利となった。いまだに目をつぶっている少年の下に歩み寄り、優しく話しかける。

「ほら、もう大丈夫だよ。目を開けて結構。」

「・・・ほんとだ、さすが千夏姉さんだね？」

「ああ、お前の大好きな千夏は強いぞ。・・・だけどね、そんな私にも勝てない相手がいるんだよ？」

少年は驚いた顔になった。どんなときでも自分と一緒だったし、少女が泣いたところを見たことがない少年は意外に思った。

「・・・誰に勝てないの？」

「・・・・それはね、泣いたときの時雨だよ。お前がね、泣いてしまうと私は不安になるんだ。だからね、お前には泣いて欲しくないんだ。・・・だから、絶対に泣いちゃ駄目だ。分かった？」

「うん！約束守るよ！」

「あとな、女の子との約束は絶対に守るんだぞ？それと、絶対に女の子を泣かしては駄目だ。それも守れるな？」

「うん！僕、絶対にそんなことしない！約束する。」

「そうか、時雨はいい子だ。ふふ、さすが私の弟だな・・・・。時雨、私が何時までもお前を守ってやれるようにおまじないをしてあげるよ。ちょっと、目を閉じて。」

大好きな少女が言うことを少年は絶対に守る。（それがたとえ、少女の肩をもめとか、やれ、金を持って来いとか・・・宿題をしろだのも完璧にやってきた。結果、少年は以外に器用な一面を持つようになった。不幸中の幸い？）今回も少年は約束をきちんと守った。

ふと、唇の辺りが暖かくなった。不思議に思ったがきちんといいつけ通り目をつぶったままだった。

「・・・・・時雨、いいよ目を開けても・・・」

少年は目を開けて少女のまっすぐな瞳を見上げた。その顔は少々、赤くなっていた。

「最後に・・・形だけが約束じゃない。心に残っていればそれは約束だ。いいかい、心ってものは離れていても・・・通じるものだよ？だからね、どんなことがあっても私との約束は守って欲しい。」

「わかってるよ、千夏姉さん！」

少年のそんな無邪気な顔を見て、少女はほっとしたのかめったに見せない優しい顔になった。普通はしかめっ面で、テレビのお笑い芸人に的確な突込みをお茶の間で連発している。

「・・・・・ふふ、時雨、私は楽しい日々を送れて楽しかったよ・・・・」

少年には聞こえないように声に出してみる。

「・・・・離れるかもしれないけど・・・・何時までも私はお前の味方さ・・・例え、どんなことがあってもな・・・・」

家にある方向に走っていく少年を見つめ、少女は自嘲気味に微笑んだ。しかし、次の瞬間にはその顔は普段のしかめっ面へとシフト。

「またね、千夏姉さん！」

「ああ、また・・・・いつかな・・・」

次の日、少年が彼女の家に行くと、黒い服を着た人たちが彼女の家の前に続々と集まっていたのであった。

朝の目覚めから始まる日常（前書き）

ちょっと明るい話になりました。

朝の目覚めから始まる日常

一、

「・・・・・ちょっと時雨！何時まで寝てるの？」

一階から少年の母親が朝から元気のある声を張り上げている。過去の少し悲しい思い出を夢に見ていた少年は現実へと誘拐されていくのであった。

「・・・・・久しぶりだな・・・あんな夢を見るのは・・・・」

少年は寝ぼけ眼で床に足をつけるとそんなことを口走る。夢の時代は小学生ぐらいの頃だと思われる。あの時、正直言ってつらかったのを覚えていた。

「・・・・・ま、どこかで見ていてくれるよね、そう思わないと・・・・・やっていけないから・・・」

「・・・・時雨！蕾は先に学校に行ってるわよ？今日から転校なんだからあの高校での最後の青春の一ページを刻んできなさい！」

少年、時雨はため息を出して一階へと降りていくのであった。

そして、朝のホームルーム。活発そうな時雨のクラスの担任の数学教師は時雨を教壇にたたせて説明を開始する。

「・・・・今日には、彼、天道時（てんどうじ）　時雨（しぐれ）君は他の高校に引越しするそうだ。すぐに引っ越すそうだ。まだ、四月で入学式からそこまで経っていないが・・・この中には彼にお礼をいいたい人もいるだろう。それでは、お礼をいいたい人はその場でたって時雨君にお礼を

言うように。」

教室にいたその中の一人・・・がその場で立ってもじもじしながらも答える。

「あのぉ・・・ええと・・・私を助けてくれてありがとうございます！」

「いえ、いいんですよ。当たり前のことをしたまでです。」

他の生徒（主に女子、そして、男子生徒が数人）が立ち上がって転校するクラスメートにお礼を述べる。

少し前のことである、と言っても、入学式の次の日、上級生に囲まれていた数人のクラスメートを発見した時雨はそれを見に行った。

そして、気の弱そうだが、美少女と言ってもいいクラスメートを掴んでいた上級生をぼっこぼこにしたのであった。

そして、もうちょっとで男子生徒が殴られるといった場面に自ら入り込み、殴られる。

クラスメートにさっさと逃げるように指示した後、暴走を開始・・・・とある、アニメの主人公機のような獅子奮迅の働きにより、残っていた上級生をすべて排除・・・・と、ここまではかなりかっこよかったのだが、相手が悪かった。

相手はその私立高校のお偉いさん方の息子たちであって、病院送りになったと聞いてお偉いさん方は怒り狂った。

それはもう、龍の逆鱗に触れてしまったようであった。

しかし、時雨のクラスメートの証言やそれを見ていた数名の生徒・・・そして、素直だとかなり定評のある時雨のクラスの担任教師の努力により、時雨は五月までの間に他の高校に転校するといったことで話は綺麗に収まった。相手をぼこぼこにしてしまったので一部の生徒達からはかなり恐れられてしまい・・・・上級生は時雨を連日

探し回った。この高校の番長だったものたちを倒したので血が騒いだのだろう・・・・。しかし、時雨はそんなものたちを相手することなく、静かに生活していたのであった。
一通りのお礼が終わり、時雨は頭を下げた。

「・・・・かなり短い間でしたが、ありがとうございました。では、失礼します。」

一応、転校することは自分で皆に伝えたかったので時雨は今日、学校に来たのだ。彼の義妹も同じ高校だ。
時雨は鞄をつかんで自分の教室を出た。そして、廊下に出たところでスタートダッシュ。怪我させてしまった相手に下げる頭もないので逃げるように一直線の廊下を駆け抜ける。だが、途中で用務員のおじさんに捕まり、しかられてしまったのであった・・・・。
なんだかんだで、どうにか校門までやってくることが出来た。時雨はかなり短い間過ごした校舎を見上げ、ため息をついた。今日、時雨が転校する高校は名前以外、知らない。暴力沙汰の事件を起こしてしまった時雨を母親は怒らなかった。しかし、転校先の高校については何も教えてくれなかった。なんでも、サプラズというやつらしい。

「・・・・短い間、ありがとう。もう、戻ってこないよ。」

名残惜しげに時雨が小さい頃に死んでしまった父親が通っていた高校に別れを告げる。なんでも、自分の父親は凄い人だったと小さい頃からよく聞いたものであった。

それから、時雨は家に向かって一直線に帰らず、ちょっと外れている道を通ることにした。そこには、近頃出来たらしい占い屋があるとの噂であった。しかし、その占い屋の営業時間は午前中でいま

だに高校生が行ったことはないらしい。そして、その占い屋の前に来て時雨は考えた。
よし、今度からの高校生活がエンジョイできるか占ってもらおう。さいわい、財布は持ってきているし、いつもより少しは多く入っているからな・・・もしかしたら年上の綺麗なお姉さんがいるかもしれないし・・・・
少し、神秘的な占い屋に時雨は入ることを決心し、第一歩を踏み出したのであった。と、サンダルをはいた中年のおじさんが出てきたのであった。そのおじさんは時雨をまじまじと眺めた後、

「お客さんかい？」

と、尋ねてきたのであった。時雨の中で勝手に形成されていた神秘的かつ、ボンキュボーンな天然形と思われる推定年齢二十四のお姉さんは消滅したのであった。

「・・・・・ええ。そうです。あなたはお店の人ですか？」

最後の頼みといった具合に時雨は口を開いた。時雨としては首を横に振って欲しかったのだが・・・・・

「ああ、そうだよ。」

こうなったものはしょうがないと、時雨はお店の中に入ったのであった。先を歩くサンダルおじさんは時雨が入店した時、嬉しそうであった。

「いやぁ、第一号目のお客さんだから嬉しいねぇ。丁寧にしないと罰が当たる！」

時雨をパイプ椅子に座らせ、自分はみかんの箱に腰を落とす。
「さて、早速占ってあげよう。ちょっと、目をつぶって集中してくれないかな？」
言われた通り、時雨は目をつぶって身構えることなく、リラックスした。このおじさんからは人を安心させるようなオーラが出されているようであった。一家に一人、いたらいいかもしれない。
「・・・ふぅむ、魔界が再び天界と戦争か・・・・。あ、もう目を開けて結構だよ。」
占い師はそんなことを言って近くに置いてあった机（学校とかにおいてあるタイプ）から白い書類を一枚取り出した。時雨の前にそれをおく。
「・・・・・時雨君、君の未来と過去は・・・まぁ、最悪だよ。そこでだ、これも一つの始まりだと思って天使になってみないかね？いまなら、初回無料サービスだけど？」
未来はどうか知らないが、今日見た夢のこともあったので時雨は頷いた。きっと彼は、おれおれ詐欺に引っかかるかもしれない。
「ええ、で、何をすれば天使になれるんですか？」
「おお、信じてくれるのか！全く、なんて素直な子なんだ。とりあえず、この書類に名前と目標を書いてくれないかな？それで結構だ。」
時雨は言われたとおり、名前を書いた。そして、目標の欄で筆を

止める。

「何でもいいよ？『我が人生、萌を極める！』でも結構だ。」

時雨は悩んだ。目標なんてもとから持ってないし、今から考えても少し時間がかかるかもしれないので思いついた文字を適当に書いてみることにした。

「ふむふむ、『一日一善』？ふぅむ、シンプルイズザベストってやつだね？気に入ったよ。これで、君ははれて天使だ。」

時雨は首をかしげる。別に体から白い羽なんて生えていないのだからそうだろう。なんとなく、不安になりながらも財布を取り出す。

「ええと、いくらですか？」

「いや、今回は御代はいいよ。君の天使としての活躍に期待させてもらうからね。君が活躍してくれれば私は利益を手に入れることがあるだろうからね。」

時雨はそのまま、店から出ることにした。全く、占いらしきことはしてもらわなかったが・・・・家ではきっと母親と義妹が待っているに違いない。

「時雨君、最後にこれを渡しておこう。お守りだよ。」

最後に、時雨はサンダルおじさんから水晶をもらい、時雨が角を曲がるまで手を振ってくれているおじさんに頭を下げて歩き出したのであった。

家に帰ると、母親と義妹が既に家の前に待っていた。車はいつで

も走れるだろう。

「兄貴、遅いよ！」

「あ、ごめん。ちょっと用事があってさ。」

「さ、時雨と蕾、さっさと車に乗りなさい。出発するわよ？」

時雨の母親がそう告げると時雨と彼の妹はさっさと車に乗り込んだ。車は少々小さいのでいっぱいいっぱいだ。

「兄貴！触んないでよ！！」

「あ・・・・ごめん。」

義妹にそういわれ、時雨は母親の隣に移動。母親はそんな二人に対して何にも言わず、ため息を出すだけであった。

蕾が母親と話し出し、時雨にはよくわからないことだったので過ぎ行く景色にいちいち感想をつけていると（あの電柱の上にいるカラスは頭よさそうだなぁ・・・・お、こっち見て睨んだぞ？凄い勇気を持ってるなぁ・・・・あ、あそこの雷おじさんが実は猫に甘いなんて噂があったけど・・・・本当だったんだなぁ・・・！あ、道路にお札が落ちてる！！）眠くなり、そのまま眠ってしまった。

『時雨、お前も大変だなぁ・・・・。』

「ち、千夏姉さん！何でいるの？今頃棺おけの中にいると思ったけど？」

『あのなぁ、前にも約束しただろ？私はお前を必ず守るってな。で、実のところを言うとな、私は人間じゃなかったんだ。どうだい、信じることが出来るかい？』

「え・・・うん。」

『全く、その性格はそのままか・・・・あれから結構経ったと思ってんだけどなぁ・・・まぁ、いいや。そんなことよりな、お前、天使になっただろう？だけどなぁ、ちょっとまずいんだよ。』

「ええと、なんで？」

『ま、頑張れよ。出番があったらまた登場するからな。』

「ちょ・・待ってよ！千夏ねえさぁーん！！」

時雨は車の中で叫んでいたらしい・・・・母親と彼の妹が時雨のことを見ていた。

朝の目覚めから始まる日常（後書き）

作者の切実な願いです。誰か、感想ください。

お兄ちゃんと妹

二、

時雨はきょろきょろと辺りを見渡し、ため息をついた。そんな時雨にわき見運転をしながら彼の母親は尋ねる。

「・・・・また、あのときの夢でも見たの？」

「・・・・いや・・・違うよ。なんでもない。単なる夢だよ。」

そういうと時雨は再び、窓の外に視線をそらした。窓枠の向こうには高速移動している景色が目に入る。そんな時雨を蕾は不満そうに見ていた。

「兄貴、なんでもないわけないんじゃないの？叫んでたよ？」

「・・・・・そう？はぁ、それはごめん。ちょっと疲れてるのかもしれないな・・・・」

時雨はため息をついてあえて蕾の顔を見なかった。蕾に千夏の話をするとよく怒るのであった。それは何故だか、時雨は分からない。

母親はため息をつき、窓の外を眺めた。

どうにもこの二人はすれ違っているところがあるらしく、さっきも蕾が時雨のことを話題にしたときちょうど時雨は寝ていたのであった。

まさしく、紙一重であった。

大体、時雨が事件を起こした後、本当は時雨があっちにある寮に住む事になっていたのだが、蕾がついでに転校したいと言い出し、それなら私もといった具合に自分も引っ越すことにしたのだ。

小さいころから近所に住んでいた千夏の影響を受けていた時雨は彼女がいなくなった後に事情があってやってきた蕾を可愛がった。彼女の前では絶対に涙を見せず、蕾を泣かすようなものは相手がどんなものでも仕返ししたのであった。
全く、出来たおにいちゃんだと私は思っていたが・・・・どうやら、たまに千夏の出てくる夢を見るらしく、夢を見たときはすんごい悲しそうな顔をしている。朝から卵焼きにケチャップをぶっかけたり、空っぽになったコップを何回も飲んでいるときもある。心ここにあらずといった調子だったが・・・・大丈夫かと聞いたら大丈夫だと答えるので大丈夫なのだろう。しかし、蕾はそれが不満らしく、段々、時雨と話すことが少なくなってきた。

「・・・・兄貴、目が死んでるわよ？」

「・・・・そうだね・・・・」

車内の中ではさっきからそんな会話が続いている。蕾なりに心配しているようだが、時雨はボーっとしていて気がついていない。生返事である。
しかし、そんな時雨にも変化があった。遠くに見える馬鹿でかい建物を見て固まったのであった。母親は思った。お、さすがの時雨もこれにはびっくりしたかと・・・・。

「・・・母さん、あの馬鹿でかい建物なに？」

「あれはね、時雨と蕾が行く学校だよ。なんでも、建物の内部では毎日、迷子が出るそうだ。」

とてつもなくでかい校舎を固まってみながら時雨は口をあけるのであった。そして、全く自分を見てくれない蕾もそろそろ、限界が

近づいていたのだが・・・・。

「よし、ここが新しい家だ。時雨、蕾、持ってる荷物を持ってさっさと降りな。私はお買い物に行ってくるからね。時雨、何があっても驚いちゃだめだぞ？」

「え？わかったよ。」

時雨と蕾をおろし、小さな車は消えてしまった。時雨は新しい我が家を見上げ一言。

「・・・・でかいね。さっきまで住んでいた家の一点五倍ってところかな？小さな庭もあるし・・・・いくらだろう・・・・。」

時雨は誰に言うでもなく、そう呟き、まるで死人のように家に歩みよった。外から見ても結構な部屋数を期待できる。前の家では時雨の部屋はかなり小さく、母親の部屋の次に大きかった部屋には蕾がいた。

「・・・・・兄貴、ちょっと話があるんだけど？」

「・・・・・蕾、どうかしたの？」

ようやく、時雨は蕾のほうを振り返り、不思議そうに眺める。その目は蕾の言うように、まさしく死んでいた。蕾はそんな兄の元に近寄り、

ばしん！どごぉ！べきどご！ふぃにっしゅ！！

鋭い音を響かせてほっぺを叩いた。そして、叩いた後に時雨のみ

ぞおちに強烈な一撃を食らわせたのであった。（その後も何発かコンボが決まった。）時雨はその場に倒れこんだのであった。そして、意識もダウン。

「・・・・あ！やりすぎた！」

最後に、そんなことを蕾が言ったような気がしたが、とりあえず、時雨の意識は電源を抜いたパソコンのようになってしまったのであった。強烈コンボを食らってしまったので時雨の体力はほぼ、ゼロに近い。まぁ、気を失ってしまったので大丈夫かもしれない。

「・・・・・。」

時雨は見知らぬ家で目を覚ました。天井には真っ白だったから初めは病院かと思ったのだが・・・・。

「・・・大丈夫ですかな、時雨様？」

見知らぬ男性の声がしたので急いでそっちの方を見た。そこには初老を向かえたと思われる見た目執事の男性が静かに立っていた。時雨は目をこすりながらその執事を眺める。執事はなんとなくだが、人間ではないような気がした。

「ええと・・・あの、誰ですか？」

「私ですか？・・・時雨様、起き上がらなくて結構です。そのままにしておかないと再び、傷が開いてしまいますからね。」

時雨は起き上がる途中でわき腹、顔、腹部、他もろもろに打撲を負っていることに気がついた。かなり痛む。

「・・・・あの、僕は何でこんなにぼろぼろなんですか？」

「・・・それはですね、蕾様がしたものです。ストレスがたまっていたものと思われます。」

「はぁ、なるほど・・・・。蕾はこんなに強かったんですね？」

「ええ、確かに強いでしょうが・・・とりあえず、私の紹介をさせてもらいます。私は蕾様に仕えている執事です。名前はですね、青木と申します。以後、よろしくお願いしますね。」

時雨は頭を下げた執事に習って頭を下げた。

「ええと、蕾はどこに行ったんですか？」

「・・・・蕾様はですね、今頃、学校に行っていると思われます。時雨様が気絶をしてしまって既に一週間が経っていますからね。私は時雨様の身の回りの世話するよう、蕾様に言われただけでございます。余計なことを言わせてもらいますが、時雨様のお母様は世界一周の旅行に旅立ってしまっていまだに帰ってきておりません。」

世界一周を一週間で帰ってこれるならそれはたいしたものだろう。そんなことを考えながらも時雨は人のよさそうな執事を疑うことなく眺めた。と、執事が再び口を開いた。

「時雨様、あなたはとても綺麗な心を持っております。・・・・・しかしですね、あなたは少々、考えすぎなのです。そして、慎重す

ぎるところもあると私は思います。・・・最後に一言言わせてもらいますが、どうか、蕾様には優しくしてください。蕾様は時雨様のことを信頼していますが・・・あなたに不満を持っているところもあります。そのことを忘れないでくださいね。」

「え、ええ・・・わかりました。」

「昼食はそこにおいてありますので、どうぞ、ごゆっくりしておいてください。私はそろそろ、お庭のお掃除をしなければいけない時間なので失礼いたします。」

そういって執事は近くにおいてあった虫かごを持って（中に時雨そっくりの人形らしきものが入っていた。どことなく、動いた気がする。）退出。ひとりとなった時雨はおかれていた昼食を口に運んだのであった。（うまかったらしい）そして、再び眠ったのであった。

時雨が再び、目を覚ましたときは近くに蕾が座っていた。その顔は少々、暗かった。

「・・・・あ、兄貴・・・。」

「・・・・蕾、学校は楽しかったかい？」

「え？うん。楽しかったよ？」

「そうか、それはよかった。ごめんね、僕がなんだか暴力沙汰の事件を起こしちゃったから・・・・来ることないのに蕾まで来ることになっちゃったしさ。」

そういってできたおにいちゃんは目を閉じた。これで怪我でも負

っていたなら死んだとギャラリーは思うに違いない。いや、絶対に思うだろう。

「そ、そんなことないよ！だってさ、兄貴は・・・その・・・ええと・・・」

時雨は蕾があたふたしながらも何かを伝えようと努力しているのに気がついた。そして、彼女が何か続きをいうのを待った。

「だから・・・その・・・・気にすることないよ！あっちが手を出してきたんだからね！元気出して！」

「・・・・そうだね、ありがとう、蕾。君が僕の妹でよかったよ。これからもよろしくね。」

「え、う、うん！当然だよ！」

そんなことを言ったベッドに寝ている時雨に蕾は抱きつき、彼女がつけた傷をそのままで触ったのであった。

しかし、珍しく蕾が自分のことを触ったので我慢せねばとおにいちゃんは奮闘したのであった。

「・・・ええと、兄貴、お散歩しない？」

「散歩？わかったよ。じゃ、ちょっと待ってくれないかな？着替えるからさ。」

時雨はたんすに歩み寄り、中から春ものセーターを取り出して着替え始めた。ベッドの上には蕾がいたままなのにかまわずそのままで着替える。

「あ、兄貴・・・意外と鍛えてるんだね？細身なのに結構筋肉ついてるよ？」

「はは、そうかな？あんまり他の人と変わらないんじゃない？」

蕾はそのまま自分の兄の着がえる姿をちらちら見ながら今日、友達となった人から気になる男性の調査法を聞いていたのでそれを思い出す。

「・・・・よし、着替え終わったから、そろそろ行こうか？」

蕾は頷いてベッドから降りて、扉を開けて外に出たのであった。

妹とデート

三、

時雨たちの家の近くにある公園では春の陽気に当てられてさっきから虫がそこらを飛んでいる。時雨はそれをほのぼのとした気持ちで眺めており、そんな時雨を蕾が虫をも射落とすぐらいの視線で見ていた。それには時雨は気がついていない。

「・・・・へぇ、気絶しててぜんぜん分からなかったけど、意外と綺麗なところもあるんだね。」

「え、う、うん！そうだね！」

不意に話を振ってきて蕾の顔を見る時雨は幸せそうだった。そして、そんな幸せそうな顔を向ける兄の顔は蕾の幸せであった。自分にこんな顔を向けるのはかなり久しぶりだと感じながらもはやる気持ちを抑え、蕾は尋ねる。

「あ、兄貴ってさ！この呼び方に不満はない？」

時雨はちょっと考えるようなしぐさをしてから口を開いた。

「う～ん、別に兄貴でもかまわないけど・・・・僕としては何でもいいよ。」

蕾が友達から教えてもらった気になる男性と仲良くなる方法、その一。まず、当たり障りのない方法でさりげなく、今呼んでいる呼び方を変えてみる。蕾はこれを実践したのであった。そして、時雨が別に何でもいいといったのでこれは自由に呼んでいいと決定され

た。蕾は決心し、自分の兄に話しかける。

「じゃ、じゃあさ・・・転校したから呼び方変えてもいいかな？」

「うん、別にかまわないよ？」

「お、にい・・・」

蕾の顔が少々、赤くなっていた。時雨は『お兄ちゃん』と来ると思った。しかし、彼の想像は見事はずれる。至近距離でぶっ放したビームライフルがＩフ○ールドによってはじかれたような感じであった。

「お兄様！って呼んでいいよね？」

時雨はずっこけ、辺りにいた鳩達はそんな時雨に驚いて逃げていく。何とか体勢を立て直した時雨はさすがにこれは凄い呼び方じゃないかと思い、蕾に意見した。

「ええとね、さすがにそれはどうかと思うんだ。」

そして、蕾も考えを改めなおした。

「そ、そうだよね！今頃、『お兄様』なんて呼ぶ人いないよね？考え直してみたよ！」

時雨は頷いて蕾を見る。今度は先ほどのように蕾の顔は赤くなっておらず、時雨は期待できると思った。

「・・・兄様でいいよね？」

・・・・ちょっとだけ、考えを改めた蕾はそう、時雨に告げた。もはや、時雨はいまさら否定できるでもなく、自信に満ちあふれたこの高校球児のような蕾を悲しくさせてはいけないと思ったのであった。

「・・・・うん、それでいいよ。」

そして、頷いた時雨に対して蕾は影でぐっと手を握り締めていた。そして、友達から教えてもらった気になる男性と仲良くなる方法、その二を試してみることにした。ずばり、スキンシップを行うのだ。

「ありがと！兄様ぁ！！」

蕾はそのまま時雨に抱きつき、時雨の胸に顔をすりすりする。しているほうの蕾はちょっと、顔を赤くして、されている時雨に至っては真っ赤になっていた。

「・・・・・ええとさ、蕾・・・・恥ずかしいよ。」

「いいよ！だって兄妹でしょ、私たち？」

「う、うん・・・・」

それ以降、時雨は蕾に抱きつかれたまま、しばしの時間が経過。そろそろ、お天道様も眠くなってきたのか沈み始める。

「・・・・蕾、そろそろ帰ろうか？」

買い物帰りの主婦たちがほほえましい感じで時雨たちの事を見て

いくのでいたたまれなくなった時雨は自分の義妹にそう告げた。しかし、蕾から返ってきた返事は静かな寝息であった。

「・・・・すぅ～・・・」

起こすのもなんだかかわいそうなので時雨は起こすのをやめておんぶして帰ることにした。蕾は思っていたより軽かったので簡単におんぶすることが出来た。

家に帰りつくと、既に家の中には夕食のにおいがぷんぷんしていた。

「・・・・おかえりなさいませ、時雨様、蕾様。・・・おや、どうやら蕾様はお疲れのようですね。」

時雨は蕾を彼女の部屋のベッドに寝かせて執事の元に戻ってくると、今日あったことを話した。その間執事は、黒くてかっこいいエプロン姿で真剣に聞いていた。片手に持っているお玉との相性も完璧である。

「・・・・なるほど、どうやら蕾様は時雨様に甘えたいのですよ。」

「・・・ええと、どうしてですか？蕾はあまり僕に近づきたくなさそうな感じでしたよ？」

執事は意味ありげな表情になり、時雨の目を見据えた。

「・・・・時雨様は過去のことばかりに捕らわれてはいませんか？過去に捕らわれ、蕾様が叫んでいるのにあなたは上の空・・・そんなことがあれば蕾様は寂しくなるものです。その裏返しなのかもしれないんですよ。」

「・・・・なるほど・・・・さすが蕾の執事ですね？」

「恐縮です。ですが・・・・明日から私はちょっと用事があるので家を空けることとなります。」

それを聞いて時雨は驚いた。この家で料理を出来るのはこの執事さんだけである。時雨、蕾には料理のスキルはほとんど存在していない。

「・・・・時雨様、心配しないで結構です。私の代わりに私の孫が助っ人に来ますからね。」

「あの・・・・その人は料理できますか？」

「ええ、腕の保障は私がしますよ。では、そろそろ私は失礼させてもらいます。あ、そうそう・・・・。」

時雨がいた部屋から出て行こうとしていた執事はその動きをやめて時雨のもとに近寄った。

「・・・・時雨様、あなた、罪人天使ですが・・・・頑張ってください。」

「え・・・・？罪人天使？なんです、それ？」

執事はそういって部屋からいなくなってしまった。残されてしまった時雨は思う。

ま、まさかあんな格好のまま、外に出たのだろうか？

「・・・・まぁ、それはいいとして作ってもらった夕食でも食べようかな？」

いいにおいのするほうに歩いていくと、そこには蕾が既に自分の分と時雨の分の夕食をついで待っていた。

「・・・あれ？蕾はもう起きたの？」

「うん、ごめんね、ちょっと近頃疲れててさ・・・。だけど、ちょっと寝てたからもう大丈夫だよ。さ、夕飯食べよ？」

時雨は蕾の前に座り、夕食を眺める。（今日の夕食はトンカツ、卵の入ったスープであった。）そして、箸がないことに気がついた。

「・・・・蕾、僕のお箸知らないかな？」

蕾は首を振った。時雨が箸を探そうと立つと、蕾がそれを座らせた。

「大丈夫だよ、兄様。兄様にお箸は必要ないよ。」

「・・・・僕に素手でこの煮えたぎっているだろう、スープと、いまだに湯気を上げている、豚さんを食べろって言っているの・・・？」

蕾は静かに首を振り、自分の箸で時雨のトンカツを掴んだ。

「・・・蕾、それは僕のトンカツだよ？」

「わかってるよ。ほら、兄様あ～ん！」

時雨はきょとんとして目の前にやってきた空飛ぶ豚さんを眺めていた。で、それが終わったら今度はニコニコしている蕾のほうに目を送る。

「ほら、冷めるから、あ～ん！」

「・・・わかったよ。あ～ん。」

時雨は顔を赤くしながらも空飛ぶ豚さんを食べたのであった。

「おいし？」

「うん、僕と蕾が作ってないからおいしいよ。」

時雨は心の中からそう、思った。もしも、この二人のどちらかが夕食を作った場合は食べたほうが地獄に行くであろう。

「兄様、今日はいっしょに寝よ？」

「うん・・・・・蕾、寝言は寝ていったほうがいいよ。あのねぇ、甘えてくれるのは兄として嬉しいんだけどね、ちょっとその・・・・・まぁ、なんというか・・・・」

時雨が何事か考えている間に蕾は泣きそうな顔になった。時雨はそんな妹を見て腹をくくった。

「わかったよ！寝ればいいんだよね？」

「うん！やっぱり私は兄様が大好きだよ！！」

こうして、時雨は妹と寝る事となったのであった。がんばれ、お兄ちゃん！

時空に降る雨

四、零

さて、ここに来てようやく、物語は分かれる。

「さぁて、と、仕事を開始しようかな・・・・。」

誰もいない夜の公園では一人の女子高校生がブランコにてアクロバットなことをやっていた。そして、空中に飛び上がって砂場に華麗に着地、十点をあげたいものだ。見事にめくれたスカートはぐっと来ます！

「うぅんと、仕事内容はここいらにいて、この前天使になったものの消去・・・・。うん、やっぱりメモにしておくべきだったな。まぁ、いつものように他の次元にでも飛ばしておけばいいや。」

どことなく、抜けたところがあるような気がしないでもないが、しょうがない。

一応、彼の紹介文を書いておこう。

名前は悪魔Ａとでもしておこうか？その悪魔Ａは当初のころは仕事熱心でとっても上司から期待されていたのだが、事件を起こしてそれから職務怠慢なので、だんだん、上司からの期待は激減、これが最後という仕事を与えられたのであった。その仕事内容は危険度Ｓの悪魔ランク達人がないといけない任務であった。というより、この悪魔の上司としては出来るだけ危険の高いものは無視する傾向があるが、お払い箱としてこの悪魔を消すはずであったが、今回はうまくいったのであった。

「・・・・ええと、相手を他の次元に飛ばす方法はどうだったかな

？」

本当は、この時点でとある少年がやってきてこの悪魔を背後から強襲、襲われた悪魔はその後、記憶を失う予定だったのだが・・・・歴史は変わってしまった。

「ああ、思い出した。『あっちいっちゃえー！！』だったな、うん・・・・。」

悪魔Ａは相手がろくに家にいるとも分かっていないのにターゲットとなっている人物がすんでいる家に目標を定めると、呪文を唱えたのであった。

「『あっちいっちゃえー！！』」

そして、あっけなくその少年は違う次元に飛ばされたのであった。

え？あっけなさすぎ？

鋭い電子音が耳をつんざき、僕は目を覚ました。

「・・・・・あ、そろそろ学校行かなきゃ遅刻かもしれないな。あ～あ、妹でもいたら『お兄ちゃん、朝だよ！』って起こしてくれると思うんだけどなぁ。」

そんなことを言ってはみたが、この家にいるのは僕だけだ。うぅむ、父さんは仕事でいないし、母さんはいない。妹も姉もいない。兄と弟は要らない。家具もほとんどなく、あるのは机（ダンボールを強化して作成）と小さいテレビ（土手で拾ってきた）だけだ。あ

と、この前寿命を全うした昭和ぐらいの冷蔵庫。そろそろ、粗大ごみとして出さないといけない。

「・・・・・朝食はどうしようかな・・・」

考えてみたが、特に何も思いつかないので考えないことにした。眠い・・・・。今なら五円玉を目の前にふらふらされるだけで寝てしまいそうだ。

「・・・・さて、そろそろ学校に行きますか・・・・」

顔を洗って朝食は食べたこととする。うん、これでいいだろう。授業中は寝てればいいだろうし・・・・。

まぁ、父さんが帰ってきてくれればこんな生活ともおさらばできるかもしれないが・・・・いつのことになるのやら・・・・。

「・・・にゃ～・・・・」

「いってくるよ、黒丸。」

近所に住みついていた野良猫の黒丸に朝の挨拶をつげる。まぁ、匍匐前進をしていたりするから本当に猫かどうかはなぞなのだが・・・・。

学校について始業チャイムぎりぎりで机に座る。
クラスメートの顔はどれもちょっとの不安が混じっているような感じだ。
あまり入学式から経っていないのもあるだろう。
あ、ちなみにこのクラスの女子たちのスタイルはまぁまぁだ。
顔も普通といったところだろう。誰かが僕のことを好きになった場

合は早い者勝ちでこの中の誰かと付き合ってもいいと考えている。
もっとも、僕としても特に取り柄というものは思いつかないし、顔も普通、勉強も普通といったところだから・・・・このクラスの女子たちともしかしたら縁がないかもしれないが・・・・・。

「きりーつ、れーい、着席！」

今日も、なれない教室での授業がそろそろ、終わりを迎えようとしている。
今日の授業は六時間まであり、今は五時間目の古典だ。まぁ、それはいいとして僕はこの連中と仲良くして行けるかどうか不安でたまらない。なぜなら、この教室には知り合いは一人もおらず、はるか遠くからこの高校までやってきてしまった僕のせいだ。ああ、古典の授業は別に聞かなくていいからちょっと暇つぶしに過去のことでも思い出そうかな？

たしか、中学のころに僕はちょっと辺りから腫れ物的扱いを受けていた。
それには事情があり、懐かしいな・・・・あれはちょうど中学に入りたての僕がまだ、中一のころだ。
桜が散ってしまっていたのを覚えている。
まぁ、小さなころから父さんが僕にやけに馬鹿丁寧に色々と教え込んでいた。
我が父親ながら何を考えているかさっぱりな人で、頭はいいのだが・・・・ちょっとねじの外れた人間のようだった。
そんな父さんだが、意外と正義感が強かった。
僕に毎日、正義と悪について教えてくれた。
まぁ、教えたといっても正義とは自分が正しいと思うことであり、悪とは自分が間違っていることであるといった感じだ。それでも、小さかったころの僕にはそれが大事なことだと思った。まぁ、そん

なわけで、自分なりに正義とは何かと考えたものだ。結果、『女の子をいじめる奴は悪である！』となったのだ。
そして、話は戻るが中一のころだ、とある女子中学生（制服が違ったので違う中学と思われる。）が、うちの中学の男子とにらみ合っていた。たしか、何かを話していた。

「・・・・あたったって言うのに、あやまらねぇのかよ？」

「そっちがあたってきたんですよ？何で私が謝らないといけないんですか？」

そんなものだった。そして、僕はかっこよく・・・・じゃなくて、近寄ったまではいいが、きれいにこけてしまい、その女の子の前に無様に登場。そして、女の子はこけた僕を睨んでこういったのだ。

「・・・あんた、何私のパンツ見ようとしてんのよ？」

そして、僕は蹴られた。
それで隙が出来たのだろう・・・・男子生徒たちは僕をけった女子中学生に襲い掛かった。完璧に隙をつかれてしまった女子中学生は、その場に押し倒された。ちなみに、男子中学生に僕は思いっきり踏まれてしまった。今考えれば、その場にあの少女が倒れたのは僕のせいだ。僕を踏んだ男子生徒が転倒してしまったからだ。
とりあえず僕は、押し倒した男子生徒をコテンパンにして、その仲間もついでにぼろぼろにし、見ていた通行人を口止めするために気絶させたのだった。今思えば、ちょっとやりすぎたと思う。そして、倒れている女子中学生に歩み寄ったのだが・・・・パンツ全開の状態だった。
みていたのが悪かったのだろう・・・・立ち上がった女子中学生は僕をにらみつけて最後の台詞を吐いた。

「何見てんのよ、このスケベ野郎！！」

うん、あれは凄かった。残像を残して動いた彼女の右足は僕の股間を狙っていてたので、足を塞いでガード。しかし、実はそれはフェイントだったらしく、下に気をとられていた僕の頭に彼女が持っていたかばんが鋭い音を響かしてヒット。

気がついたら、病院だったというわけである。
僕が通っていた中学校はこの事件を記録から抹消。あまり関わりたくなかったのかもしれない・・・結構な名門中学だったから・・・しかし、噂というものは広がるらしく、この事件の犯人は僕ということで生徒たちの間では噂となった。まぁ、中学のころには他にも色々やってしまったから仕方ないかもしれない。

「・・・・・で、ここの現代語訳は今からやる小テストに出すからね？・・・・」

まぁ、そんなこんなで、中学時代は生徒からも先生からも厄介者だった。中一と中二だったころは連日、上級生の特別パーティー券（会場は体育館裏側、参加メンバーは見た目が取っても悪そうなお兄さん方）をプレゼントされていたものだ。たまに、隣町の中学からの招待状もプレゼントされたものだ。全く、僕としては女の子からのお誘いが良かったのだが・・・・。

ま、こんなもんだったぐらいとしか、想像が出来ない。
ちなみにいうなら、僕の通っていた中学はやってくる生徒に偏りがあり、極悪と超おとなしいと、両極端だったため、よく絡まれていたものだ。
まぁ、僕はどちらかというと真ん中に部類していただきたい。

中学は物静かでかわええ女の子がたくさんいたものだが・・・・僕にはあまり話しかけてきてくれなかった。
他の男子には話しかけていたのにな・・・ぐすん、まぁ、それはそれでいい思い出として僕は知らない土地に行ってみたくなった。父さんは無言で頷き・・・といっても、教えたかったのだが、居場所が分からないので教えようがない。ということで、僕は見知らぬ高校へと進学したのであった。いまだに、通っている高校の漢字を僕は書くことが出来ない。洒落にならんぐらい、この高校の漢字は難しいのだ。
さて、そろそろ真剣に眠くなってきた。まぁ、古典ぐらいは大丈夫だろう・・・・グンナイ、いるかもしれない我が妹とお姉さま・・・・

「・・・・・はぁ、折角、世界を滅亡させた挙句に、他の次元まで吹っ飛ばしてすべてオールキャンセルしたんだけどな・・・やっぱり、伊達じゃないな。」

どこかの制服を着た男子生徒は双眼鏡をはずしてため息をついた。そして、双眼鏡を学校から、近くのマンションに移動させる。

「・・・・おほ、たまらないね。」

顔をにやけさせながらも簡単のため息を漏らしていたが、その顔がちょっとあせっていた。

「やべっ、気づかれちゃった。俺の変装がばれるなんてな・・・・さて、とんずらするか。そろそろ、俺がいなくなったのに先生も気がつく頃合だろうからな・・・・」

男子生徒は急いで屋上から姿を消したのであった。屋上で草むら（しかも大型）をまとっていたらばれるに違いない。まぁ、そんなこんなでその謎の草むらの抜け殻はそのビルの屋上から姿を消したのであった。そして、少し経った後、一人の少女が屋上のドアを開ける。

「・・・・く、一足遅かったか・・・・」

その声には悔しさも混じっていた。そして、これからどうなるのであろうか？

時空に降る雨（後書き）

ええと、ここから話は変わっていきます。まぁ、どうなるかは期待してて待っててください。

暗闇

一、

僕は今、教室にて勉強中だ。

「はぁ、彼女でも出来ないかなぁ・・・・・」

僕、以外誰もいない寂しい教室に僕の声が反響する。
はぁ・・・・寂しいものだ。
全く、一人で勉強するなんてなぁ・・・・・。
今日の古典の小テストで零点を取ってしまった僕は・・・・いや、昨日は夜更かししてて・・・眠かったんだ。
ちょうど、五時間目だったのでうとうとしてしまい・・・・・一門も解いてないままに回収。
結果、先生から古典の問題がずらりと並ぶ恐怖のプリントを渡されたのであった。
クラスから声も聞こえなくなってから何分が経ったのだろう？一応、まだ外では運動部の部活が色々やっているようだ。一年生の声が聞こえてこないのはまだ、入学式があってから一週間しか経っていないからだ。そろそろ、辺りも暗くなりかけており・・・・どうやら、半分もいっていない古典のプリントは家でしたほうがよさそうだ。
く、わからねぇ！！

家に帰るため、荷物をまとめて鞄の中に入れ、教室の電気を消す。
ま、先生の怒った顔が簡単に想像できてなんだか・・・・まぁ、どうせ、なんとかなるさ。

期待を持って下駄箱を開ける。はぁ、今日もピンクの手紙は僕の下駄箱の中にいなかったか・・・・まぁ、今の時代で手紙を下駄箱に入れる人が何人いるだろうか？ぶっちゃけ、怪しむほうが先だと思うが・・・・・。まぁ、僕としては何とかならないもんかね？一

度でもいいからそんなものが下駄箱に入ってたら嬉しいんだが。
帰り道・・・・ほとんど沈んでいる太陽を見ながら家に帰るとしよう。ああ、春は来たのだが・・・・僕に春は来るのだろうか？どこかに美少女でも転がっていないだろうか？まぁ、転がっているのなら・・・・この世に彼女のいない男なんていないだろうが・・・・。
この辺りの帰り道は夜は物騒だそうだ。
よく、女子高生が襲われているらしい・・・・女子中学も襲われているそうだ。
まぁ、僕はもともとここに住んでいたわけではないので分からないのだが・・・・とりあえず、ここいら辺には変質者が続発中で、不審な行動をしている人物はすぐに警察に連絡される。
ええと、この前は・・・・道で美少女が出てくる漫画を見ていたおたくっぽい人が警察に連行されてったな。
僕としてはあれはただ単に家に帰って読むのが面倒だったからではないのかと思うのだが？まぁ、入学してから割合良く見かけていた男性だったが・・・・今では一度も見ていないな。と、僕がそんなことを考えていたのが間違いだったのか・・・・それとも、人気のかなり少なく、学校でもそこは通らないと決められていた・・・・主に女子だが・・・・道を通っていたのが間違いだったのかもしれない。まさか、男を襲う奴なんていないと思っていたのだが・・・・

僕が襲われてしまった。

電柱の暗闇から現れた相手の行動は素早かった。さっさと僕の後ろに回りこみ、一撃。結果、僕の意識は面白いように暗闇の中に放り込まれたのであった。く、金目的か？

吹っ飛んでいった意識が戻ってきたのはいつぐらいだったのだろうか？まぁ、意識がなかったのでどんなことを考えていたのかさっ

ぱりだったが・・・・なんだか、いい夢を見ていた気がする。うん、もって帰りたいぐらいの可愛い子が・・・僕をどこかよくわからない土地で拾ってくれた夢だ。うん、ちょっと自分の脳みその中がやばくなってきたのではないだろうか？夢の中まで女の子が出てくるなんてとうとう、僕の頭も御陀仏かもしれん。とりあえず、目を開けることにしよう。

「ん・・・・。」

頭がすんごい、柔らかい。そして、僕の体には布団が重ねてあった。うん、とっても高そうだ。僕がこんなものをかぶっていたら罰が当たりそうで怖い。

「・・・・・？」

しかし、ここはどこだろうか？そして、何でこんなところに寝ているんだ？そして、僕は誰だ？・・・・・名前が思い出せん。・・・・・あれ？

「・・・・・？？？」

！はエクスクラメーション・マークと言って、感嘆符と呼ばれているものだ。いや、こんなことは覚えているのに・・・・自分の名前が思い出せないなんて・・・・・。

「・・・・・。」

ああ、気になるなぁ・・・・・。

「だいじょうぶか・・？」

く、今度は幻聴まで聞こえてきたか。うん、渋い声だが・・・どうやら、女性のようだ。名前も思い出せなくなってしまった挙句、幻聴まで聞こえてくるなんて・・・・てか、僕は何歳だ？

「ええと、大丈夫かね？」

「はい？」

顔を上げる。そこには、どこかで見たような顔があった。ふむ、これは夢に出てきた人だな。うん、可愛いというよりかっこいいというほうに部類するのかもしれない。・・・・今度は幻覚まで見えてきたか・・・・疲れがたまっているのかもしれん。

「・・・・さっきから、首をかしげたり、頭を抱えたり、目がうつろになっているが・・・大丈夫かね？」

「・・・いえ、どうやら・・・幻聴や幻覚が見えているようなので・・・・大丈夫じゃないようです。どうやら、僕の脳みそは真夏のアイスクリームのようになってしまったようです。」

はぁ、やばいね。ベッドの上にのって僕を眺めている・・・・というより、僕の上に馬乗りになっているなんて・・・・ほら、なんだか・・・襲われている感じだね？・・・・！

「・・・うぐぅ！！」

「ど、どうした？」

急に、僕の頭が痛くなった。いや、すんごい痛い。どうやら、何

かの言葉に反応したようだ。関係している事柄が再び起こった場合に消えてしまった記憶が戻ってくるって誰かが言っていた気がする。しかし、洒落にならんぐらいの痛さだ。く、死ぬ前に・・・・せめて、せめて・・・・。

「ちょ、何するのだね？」

「・・・・・。」

目の前にいる女の子に抱きついておこう！！え？変態？いえいえ、荒療治ってやつです。この後の展開を見ていれば分かりますからね。

案の定、女の子は抵抗・・・してくれなかった。おい！！少しは抵抗しなさい！あなたが暴れた結果、あなたの手が僕の頭にあたってもしかしたらいたいのが治るかもしれないでしょ！え？テレビを叩く時代は終わったって？く、僕の頭の中は古臭いのか？

「・・・あの、その・・・お手柔らかにしてくれ。」

うぉい！！何顔を赤くして目をつぶってんですか！！く、何がお手柔らかにか知らんが・・・この頭痛をどうにかしてくれ！！ええい、この人はどうやらあてにならんようだ。何か・・・何か・・・頭を叩くものはこの部屋にないのか？

見ると・・・いや、頭痛がしているのに冷静だな、僕。

まぁ、それはいいとして、辺りは純日本なお部屋であった。部屋には掛け軸や木刀などが置かれており、うん、障子もいい味を出している。さて、状況把握はこれでいいとして・・・・僕は木刀を自分で持って思いっきり頭に打ちつけたのであった。それはもう、その音に目を空けた女の子が僕をびっくりしたまなざしで見ていたから間違いなく、凄かったに違いない。

さて、その御蔭で段々、気が遠くなってきた。これでこの嬉しい

が・・・いや、かなりいい感じの夢から抜け出すことが出来るに違いない。ああ、さらばだ・・・・・この世の天国よ・・・・。

次に目を開けたら、自分の部屋だった。うん、まだ誰も・・・・いや、僕と親父しか住んでいないが・・・しかも、親父は五年ぐらい前に見たきりで・・・いや、一応、写真では元気な顔を見せてくれている。まぁ、どこかわからねぇ文字で手紙を書いてくるのもあり、手紙の最後にいつも『日本語以外も勉強しろよ。』と書かれている。

「あ、起きたか。おとうさんから手紙が来ていたよ?」

「あ、どうも。」

ええと、今度はどっから来てるんだ?全く、自分の息子の入学式にも顔を出さないなんて酷いもんだ。

「・・・・はぁ、どっから送ってきてんのか全然、わかんねぇ。」

「それはだね、きっと、中南米辺りだと思われる。」

はぁ、そうですか、博学ですね。全く、それならそうとちゃんと書いてくれればいいんだ。そうすれば僕もこうやって他人に教えてもらわなくて良かったのに・・・・?

「・・・・あなた、だれですか?」

父親さんからお手紙ついた。

二、

気がついたら、自分が何者なのかと考えることがないだろうか？まぁ、仮にあったとしてもそれは名前が出てきたところで考えるのはやめになるだろう。それはそれでいいとして、少年は自分の名前を忘れたままであった。

「・・・・私か？私は冬野（ふゆの）　氷（つらら）と言う。」

「いえ、そうではなくて、何で僕の家にいるんですか？」

「それはだな、この手紙を読めば分かると君のお父さんが言っていたぞ？」

彼は手に持っているなんてかかれているのか分からない手紙を眺める。真剣に眺めてみたが・・・・日本語が出てくることはなかった。

「・・・・読めません。」

「そうか、では、私が読ませてもらおう。いいかね？」

「はい、ぜひともお願いします。」

読めない手紙はただの紙切れだ。うん、紙ヒコーキニでもして飛ばせば気が済むかもしれないが・・・・とりあえず彼は家にいる氷と名乗る人物に手紙を渡した。

「・・・・・『愛する我が息子よ、父さんはかなり元気だ。あ～至急と言うことで色々書きたいこともあったのだが・・・書くことは出来ないので簡潔に言わせてもらおう。父さんが研究していたものがだな、盗賊に奪われた挙句・・・・お前が住んでいる近くまで持ち込まれたそうだ。盗賊側はそれが本物かどうかお前を使って試したらしく・・・・実験の結果は今、お前と同一化している。つまり、父さんの実験結果はお前となってしまったのだ。』と書かれている。分かったかね？」

少年ははっきり答えた。

「いえ、さっぱり分かりません。」

「では、二枚目に行ってみよう。・・・『で、連絡を受けたので・・・とりあえず、どうにかしようと思ったのだがね、どうすることも出来ないんだ。それはまだ、どんな能力があるのかさっぱりなので・・・とりあえず、お前がくるくるパーにでもならないように助手をつけておいた。ええと、彼女の名前は冬野　氷といってだな、ちょっと怖い顔でとっても冷たそうに見えるが・・・いや、事実冷たいぞ？まぁ、そんなことは父さんではなく、お前に関係しているからな。さぁて、お前の体の中にある父さんの実験結果はだな、天使だ。しかも、普通の天使じゃ面白くないから堕天使にしておいた。』・・・私はそんなに冷たくないぞ？」

手紙はそこで終わっており、それ以上は書かれていなかった。

「・・・・堕天使？なんだそりゃ？ええと、氷さん、何か分かりますか？」

「はっきりいって全く分からない。教授の試作段階の結果だからな。

それと、教授の電話番号だ。手紙じゃ話せないこともあるだろうからここに電話して欲しいといっていた。」

渡された紙切れを手に持ち、携帯電話からかけてみる。

「・・・・・・。」

『・・・お、起きたか？どうだい、目覚めたときに美少女が目の前にいる感じは？』

「嬉しいけど・・・いったい、この人は何なんだよ？」

『あれ？彼女言わなかったのか？氷さんはお前のことを心配して外国からわざわざそっちに転校してきた・・・・お前の許嫁だぞ？』

「・・・・許嫁？何だそりゃ？」

『それはだな、お前が生まれてきて・・・・お前が五歳のころだったかな？決まったんだよ。』

「・・・・・知らないよ？どうすりゃいいんだ？」

少年は近くで秘書よろしく、立っている少女を見る。目が合った。顔を赤くして背ける。

『ま、何でそう決まったかは父さんは忘れてしまったが・・・・詳しいことはその氷君に聞いたほうが早い。というより、今父さんは銃撃戦の真っ最中だ。じゃあな。』

一方的に電話を切られ、困惑しながら少年は近くに立っている少

女を見る。少女はどうやらだんだんこっちに近づいてきているようで・・・・さっきよりも顔よくわかるようになった。

「あの、僕は昔あなたに会ったことがあるんですか？」

「・・・・ああ、肯定しよう。私は過去に一度、君に助けられた。しかし、そのおかげで君はある程度過去の記憶を失っていると聞いている。・・・・忘れているのなら話そうか？」

「ぜひ、お願いします。」

少女は話し始めた。

それは、昔の話・・・・少年が五歳のころだ。

道を一人で歩いていると一人で鉄棒を何度も回っていた女の子を見つけた。

赤の他人だった彼女と少年はその日、たまたま一緒に遊んでいた。

すると、どこかの女性がそんな彼女を連れ去ろうとしたのだ。

それに驚いた彼女は何をするだけでなく、震えていた。

少年は別段、彼女のことを良く知らなかったが・・・・とりあえず、助けたほうがよさそうだと思い、たまたま作っていた泥団子をその女性の顔に当て、女の子の手を引いて交番まで駆け込んだのであった。

しかし、交番まで駆け込んだのは良かったが・・・・男の子はどうやら怪我を負ったらしく、そのまま病院に搬送された。

頭を強く打ったらしく、彼のお父さんがお見舞いに来たときには何も覚えていなかった。名前も覚えておらず、自分の父親の顔を思い出すのもかなりの時間が経った後であった。そして、事件があったところに行くと、少年は急に座り込み震え・・・・気絶してしまうのでその土地から少年は引っ越すことになったのであった。

「・・・・私はその後、君のお父さんについて行き、外国で君のお父さんの研究を眺めていたのだ。いや、助手だったといったほうがいいだろう。」

「あの、許嫁の話は？」

「ああ、そうだったね・・・はじめ、男の子は女の子・・・・つまり誘拐されようとした私をただただ、眺めていたのだ。まるで、珍獣を見るような目をしていたよ。で、私が・・・助けてといったらその少年はなんていったと思う？」

きっと、自分のことなのだろうと分かったが、そのころの記憶はどうやら脳内のゴミ箱に収まっているらしく・・・・パスワードまでかかっており、取り出すのはどうやら無理のようであったので彼は答える。

「・・・なんていったんですか？」

「・・・私と結婚して欲しいといってきた。理由は・・・凄いからだそうだ。」

「・・・・・。」

さて、なんて返答すればよいのか分からなかったがとりあえず、考え付く常識的なことをいってみることにした。

「・・・・よく、氷さんの両親が納得してくれましたね？」

「まぁ、事実、少年は私の命の恩人だったしどうやら君のお父さんに興味を持っていたそうだ。だから、私が結婚したい男の子のこと

をこと細かく伝えたらあっさり承諾してくれたよ。」

「・・・・・。」

少年は固まり、少々頬を朱に染めているなかなかの美少女をまじまじと眺める。さぁて、これから少年はどうなるのであろうか？

微妙な沈黙が続き、どうしても見詰め合ってしまう。うん、なかなかいい雰囲気であったが少年はとりあえず聞きたいことを聞いてみることにした。

「・・・・とりあえず、聞きたいことを質問してもいいですか？」

少女は何を勘違いしてしまったのだろうか？顔を更に赤くして両手で押さえている。

「・・・ええと、スリーサイズかね？それとも、どんな趣味があるとか・・・それから・・・」

「・・・いえ、そうではなくてですね。」

少女はとりあえず、正座をしてベッドの中にいる少年を見つめて真剣な顔になる。

「・・・・まず、僕の名前は何ですか？それがわからないと話のしようがありません。」

名前

三、

さて、名前が分からないとは致命的なことだ。なぜなら、返事を出来ない、テストで名前を書けない、等等・・・色々と困ることもあるのである。

「・・・・うぅむ。教授の実験結果に名前を忘れると書いてあったが・・・うむ、君の名前はだね、坂凪（さかなぎ）　驟雨（しゅう）。ええと、ほかの事は覚えているかね？」

「ええ、大丈夫です。ありがとうございます。じゃあ、次の質問していいですか？」

「ああ、構わんよ。」

少年は言いたいことを一旦、頭の中でまとめ・・・・どのようにしたら面白おかしく話せるか考え・・・・やはりまじめに聞いてみることにした。スリーサイズはまた今度としたほうがよさそうだと思い、首を振って聴く。

「・・・・父さんが言っていた天使と堕天使って何ですか？」

「うむ、あれはだな・・・・教授の頭の中のものを実際にやってみたらどうなるかと言うものだった。まぁ、簡単に言うなら人工的に天使を造ってみた結果だな。しかし、教授は天使じゃ面白くないから堕天使にしようといって堕天使が計画案となったのだ。そして、教授は現地の酒場でその堕天使が入っていたカプセルを盗まれたのだ。」

「で、盗んだ人たちはそれが本物かどうか確かめるため、僕に試してみたと？」

「ああ、その堕天使はまだ実験段階でね、何かに同化しないと力が発揮できないのだよ。で、それを知ってはいたが・・・同化したらどうなるかまではしらなかった盗賊たちは造った本人の息子に対して使ったのだ。実験は見事成功。結果、君はめでたく堕天使となることとなった。しかし、悲しいことにどのようなことが起きるのかさっぱり分からないのだ。私たちはなんだか分からない植物の種を君の種に植え付けてしまったのだ。」

「・・・・ええと、もしもですがね？そのぉ、僕に備わってしまったその堕天使の力とやらは本当は誰に試されるはずだったんですか？」

なんとなく、気になったので聞いてみた。まぁ、ある意味での幸運かもしれない。

「・・・・私だ。だから、試験者となってしまった驟雨君のところまでやってきた。まぁ、一応のところは家事は出来るので君の妻としては・・・・合格ラインに達していると思う。」

いえいえ、どちらかと言うと僕のほうが足りてなさそうですよといいそうになるのをこらえ、驟雨は答える。

「・・・ええと、その・・本当にこの家に住むんですか？」

「いや、君は・・・こっちでは死んでいることになっているらしい。教授が君を死亡扱いさせており、高校には提出済みだ。まぁ、確か

退学したとなっているらしい。」

（ううむ、父さんめ・・・まるで悪の首領みたいな俊敏さだな。いったい、これからどうなることやら？まぁ、あの高校もなかなか良かったけど・・・。）

「じゃあ、これから僕はどうなるんですか？」

「安心してくれ。それについてはすでに行き先が決まっている。そうだな、今から行くとしよう。」

驟雨が彼女に連れられて家の外に出る。まぁ、家といってもアパートの一室であり、ぼろぼろなのだが・・・・そのアパートの前に大きな車が止まっていた。

「あの・・・これ、なんですか？」

「私の家に置いてある車だ。これで私の家に行く。」

氷は顔を赤くさせ頬に手を重ね・・・・何故か構えている驟雨にこう告げた。

「・・・安心して欲しい。部屋は一緒だ。」

「いや、安心できないと思いますが・・・。」

二人は車に乗り、乗ったところで車は緩やかに走り出した。その社内には彼らのほかにも二人のお客さんが乗っていた。

「・・・・あの、この人たちは？」

「うむ、あっちの高校で生徒会をしているものたちだ。それと、詳しい話はあっちについて話すとしよう。」

どちらも驟雨から見たら美少女であった。彼は失礼にならないくらいに相手の顔を確認してみた。と、その中の一人がそんな彼に話しかけた。

「・・・・どうも、あの時はすいませんでした。」

「・・・あの時？・・・ああ、君はあの時、不良に襲われてた人か・・・。うまく逃げれたんだね？」

氷は不思議そうに二人を眺め、驟雨に無言の眼差しを送信してきた。彼女の言いたいことを解読するなら次のようになる。『あの時とは何だね？』

驟雨は彼女に話すことにした。別に隠すことではなかったからである。

入学式のときであった。

高校生活のしょっぱなから遅刻しそうな状況となってしまった驟雨はかなり慌てていたのであった。

彼は電池が切れていた目覚まし時計が悪いといっている。

さて、そんな驟雨が走って高校に向かっていると、途中で一人の不良に絡まれているどこかのお嬢様のような感じの人を見つけた。

しかし、少し遠く、ここから行っても彼女が連れ去られるほうが早いと思った驟雨はそこいらに転がっていた手ごろな石を持ち上げ、放り投げた。

投げた後になって、自分が少々、運動音痴だと気がついた彼は絡ま

れているほうの女の子に向かって大声で叫んだ。その声を聞いた彼女は驟雨の行ったことを的確に理解し、頭を下げた。そして、見事不良の顔に当たり、隙を突いて絡まれていた女の子は逃げ出すことに成功したのであった。ちなみに、石が当たった直後にすでに驟雨は安全圏まで退避しており、不良に顔を見られることはなかった。

「・・・・ふぅむ。なるほど・・・・。」

「まぁ、助かってよかったよ。」

「・・・・ええ、でもですね、実は・・・その、私はあなたに謝らないといけないんですよ。」

「・・・何をですか？」

驟雨は一物の不安を覚えた。なんだかあまり聞きたくない感じの雰囲気である。

「ええと・・・実はですね、私たちがあなたに堕天使を投入してしまった者たちなんです。ええと、私はどちらかと言うと、後方支援なので・・・戦闘のほうは苦手でですね、私を助けてくださったあなたを調べるために色々と情報を探し回ってたんです。ええ、組織の力を使ってまで調べました。」

全く持って執権乱用といったものかもしれない。まぁ、理由が不純とはいかないが・・・でも、それはそれ、これはこれなのでやっぱりいけないものだ。

「それで、見つけたまではいいのですが、それが・・・あの教授さんの息子さんだって知ってですね、たまたま一緒に見ていたこちら

の・・・」

彼女が指差すほうには眼鏡をかけて驟雨をまるで観察しているかえるに送る目で見ていた。

「・・・人に見つかっちゃってですね、上司に報告されて・・・結果、驟雨さんに堕天使を投入することになってしまったんです。」

ここに、驟雨の人生を半ば変えてしまった少女がいる。驟雨はあっけにとられ黙り、氷は納得したような顔をしていた。

「・・・・驟雨さん、つまり・・・恩を仇で返すことになってしまったんです。すいません。」

車内で頭をぺこぺこ下げる。隣の少女は驟雨を見ており、ある意味、興味深そうであった。驟雨に至っては複雑な顔をしており、自分の人生と子のこの幸せがどちらが大切かを考えており、途中まで考え、へんな計算式が頭に出たところで考えるのをやめた。

「まぁ、その話はあっちについて返答するとして、驟雨君、少し眠ったほうがいいぞ？」

先ほどまで寝ていたが、急に眠くなってきた驟雨は目をつぶることにした。この車は張りぼてではないらしく、寝心地も最高であった。

「・・・・そうですね、さっきまで寝ていましたが・・・・なぜだか、疲れました。精神的にも何がなにやらさっぱりですので少し、失礼します。」

名前（後書き）

どうも、どうだったでしょうか？できましたら評価、感想をよろしくお願いしたいと思います。

聖斗界メンバー

四、

彼が寝て、何があったのか知らないが・・・とりあえず、驟雨が起こされたときには一つの高校の前であった。少し前まで通っていた高校よりはるかにでかく・・・・比べ物にならないだろう。

「・・・驟雨君、生徒会室はこっちだ。そこで詳しく話をさせてもらう。」

「・・・わかりました。」

寝ていたので目がちょっと重たいが・・・驟雨は気合を入れて校門を踏みまたいだのであった。目指すは、生徒会室である。

「・・・ようこそ、生徒会へ・・・生徒会長として歓迎するよ、坂凪　驟雨君。」

そういったのは氷であった。驟雨はそんな彼女を見やる。彼女は驟雨の視線を受けて真っ赤に染まった顔を抑えておくに置いてある高級そうな椅子に座る。

「・・・ええとだね、君に堕天使が投入されて一ヶ月が経っているんだ。それで、どのような結果が巻き起こるか興味を持った教授・・・と、君に投入した堕天使に興味を持つその組織はだね、今のところ停戦で・・・・協力方向にあるんだ。で、二つの監視下に収まっているこの高校で君はがんばって欲しいんだ。まぁ、ちょっとこっちの高校には問題があるのだが・・・・なぁに、一度投入してしま

った堕天使は取り出し不可でね、大丈夫、誰も驟雨君を解剖しようとする愚か者はいないよ。」

物扱いされているようなので・・・驟雨の顔に少々ばかり怒りの色が見えた。だが、氷が本当に申し訳なさそうな感じで、驟雨の近くに立っている・・・驟雨に助けられた女の子にいたっては今にも泣きそうであった。ちなみに、眼鏡をかけている女の子はどこかに行っていなかった。

「はぁ、分かりました。一応、新しい環境に慣れるようがんばってみますよ。何か僕に面白い能力でもあるんですか?」

場を和ませようとして、努力してみた驟雨だが、失敗に終わる。何事にもまじめな氷は真剣な表情になり、答えた。

「ええとだね、まず、爆発的な回復力や耐久度が既に人間の数倍は軽くいっており、計測不可能だ。例えるなら・・・驟雨君が腕をちぎられてももっていかれたぶんの栄養、半分で君の腕は再生可能だ。それと、人間よりはるかに強い。まぁ、普段は普通の人間だが、何かの拍子に力が解放されたら危険だ。」

「・・・僕はどこかの人造人間ですか?」

どことなく、聞いたのが間違いだったと思いながらも泣いている少女から椅子を勧められたので座ることにした。また、なんとなく、暗くなった場を和やかにしようと努力してみることにした。今度は泣いている女の子に聞いてみることにした。

「・・・・ええとさ、僕の情報が何たら〜って、いってたけど・・・自己紹介文みたいなのかな?」

「・・・ぐす、ええとですね、組織の情報網は凄いですから・・・まぁ、自分のことなんですからいいですよね？教えてあげますよ。まず、坂凪　驟雨。十五歳で・・・・（中略）・・・それで、好きなコスプレは意外性でバーテンダーの格好。まぁ、情報の一部ですがざっとこんなものですか。」

彼女が語り終わり、約、十分ほど経った。
ほぼ、出された情報は完璧であった。
氷は何か考えるような感じになり、驟雨は白く燃え尽きていた。だれだって、秘密にしておきたいことはあるものだ。彼の場合は最後の・・・・趣味だが。と、微妙な雰囲気となったところで生徒会室の部屋が開いた。三人の少女たちが入ってくる。先頭は眼鏡の美少女であり、次に、右目に眼帯をしている美少女、最後は鋭い目をしたこれまた、美少女であった。

「うむ、全員そろったようだな。では、みんな、驟雨君に自己紹介して欲しい。」

泣いていた・・・いや、今にももう一度泣きそうな彼女が前に出て驟雨にその赤くなった目を向ける。

「どうも、笹崎（ささざき）　柵木（たなぎ）っていいます。生徒会では書記担当です。好きな食べ物はトマトで、嫌いな食べ物は魚です。ええと、好きな男性のタイプは・・・優しい人でええと、それから・・・・・（中略）・・・・って、このくらいでいいですかね？」

いや、自己紹介の長いこと、既に、二十分は超えているのではないのだろうか？その説明を聞いて驟雨は真っ赤になっており・・・少々、過激な部分も含まれていた。

「・・・・じゃあ、次。柵木のように別に長くなくて結構だ。」

氷は頭を抱えながらそういい、眼鏡をかけた少女に矛先を向ける。眼鏡少女は驟雨の目に目線をそろえる。驟雨がいたたまれなくなって右のほうにある壁に目線をそらすと、少女は驟雨の目線の先に移動し、必ず、彼の目を見るようにしているようだった。

「・・・佐薙（さなぎ）　佐尾姫（さおひめ）。担当は情報収集。よろしく、坂凪君。」

「・・・う、うん。こちらこそよろしく・・・」

驟雨の前に白く透き通るような手を出して佐尾姫は硬直。握手の準備だと気がついた驟雨はその手を掴んだ。意外に、手は温かかった。

「・・・・では次。」

次に前に出たのは右目に眼帯をしている少女であった。なんとなく、危ない雰囲気がしないでもない。

「鎧王（がいおう）　斗月（とつき）という。担当は敵の追撃。趣味は武器の歴史や使用法、手入れだ。以上。」

差し出された手を掴みしげしげと相手を見る。相手は驟雨をコーヒーに塩を間違って入れてしまったような顔で見ていた。どことなく、失礼そうな少女であった。あと、文面では分かりづらいと思うので書いておくが、偉そうにしている割には背が小さい。

「・・・・では、最後。」

最後に出てきたのは後ろで髪を結っている少女であった。どことなく、目が冷たそうな光を放っている。

「・・・・私のことを冷たいと思うか？」

「・・・・ええ、目がかなり冷たそうですからね。」

「・・・ふん、初対面で私にそんなことを言う無礼者・・・もとい、勇気があるものはお前が最初だ。ありがたく、名乗ってやろう。私の名前は都竹（つづき）靭（ちな）だ。担当しているものは主に敵の排除だ。よろしくな、堕天使。」

「ええ、よろしくお願いします。」

火花が散っているのが外でも分かるくらいの仲の悪さでもあった。水と油である・・・・。

「・・・・まぁ、今日のところはこれまでとして、皆、解散して結構だ。驟雨君には教えておかなくてはいけないことを私が今日のうちに教えておくので、ついてきて欲しい。」

他のメンバーはさっさと帰り支度を始めた。そして、皆は荷物を手に持ち、最後に驟雨の元に集まった。

「ええと、あの時のお礼です。」

「・・・・これ、試しに飲んで・・・・」

「・・・護身用だ。受け取ってくれ。」

「ふん、私からもだ。夜道には気をつけろよ？」

安産のお守り、謎の液体、鋭利な刃物、小型小銃・・・どれも、もらって嬉しいものではないと思われる。それらをしばし眺め・・・・

「う、うん。大事にするよ。」

驟雨は首をかくかく動かしてもう一度、自分の手の中にあるものを眺めてみた。そうしている間に他の皆は退出。残ったのは氷と驟雨だけとなった。

「驟雨君、ええとだね、今から君が住むことになる家を紹介するよ。」

「あ、はい。よろしくお願いします。」

二人で校舎内を出て誰もいない校庭を見渡した。今日は日曜日なので誰もいない。そろそろ、輝いていたお天道様も墜落する時間帯である。

あなたのお家

五、

黒塗りの車が再び止まったころ、驟雨の目の前には学校に負けないぐらいの大きさの建物が立ちはだかっていた。

「・・・・・。」

「さて、ここが私の実家だ。驟雨君も一度だけ、ここで眼を覚ましたことがあっただろう？確か、一ヶ月ぐらい前だったかな？」

何を思い出したのか、氷は顔を赤くして頬をおさえた。驟雨はただただ、そのでかさに見とれ、固まるだけであった。

中は和風と洋風が混じっているようなもので、和室もあれば洋室もある。そして、何より驚いたのは執事やメイドさんたちがいっぱいいることであった。

「・・・・・すごいですね。」

「ん？そうかね？」

平然と氷は驟雨の先を歩き、そんな氷の後を縮こまりながら驟雨はまるで泥棒のような感じで歩いていた。と、そんな二人のところに髪の毛に少し白髪が混じっている男性と綺麗な女性が現れた。

「おや、氷、帰ってきたのかい？」

「ええ、今ついたところです。驟雨君、この人は私の父で・・・・。」

「うむ、私は冬野（ふゆの）　権蔵（ごんぞう）と言う者だ。で、こっちが私の妻の・・・・。」

「冬野（ふゆの）　雹（ひょう）と言います。・・・・驟雨さん、体の調子はどうですか？」

「え、ええ・・・健康体です。別に悪いところはありません。」

そういうと氷以外の二人は笑いながら去っていった。なんでも、今から仕事に行くそうだ。

「・・・・驟雨君、君の部屋はここだよ。」

その後、氷に案内されたところの部屋は水色で統一されていた部屋であった。ベッドはどこの王様が使っているのか知りたい天蓋付のベッドで、その馬鹿でかいベッドの上には枕が二つ置かれている。そして、その隣にはこれまた野生の熊が寝ているのではないかといった大きさのリアル熊のぬいぐるみが番をしていていた。

「・・・・ええと、僕に熊は必要ないですよ？」

「うむ、驟雨君には悪いが、ここは私の部屋だ。・・・・ええとだね、その・・・部屋のあまりがないからね、一緒なのだよ。」

慌てながらもそんなことを言う生徒会長。驟雨はそんなことをいわれて心底驚き、もう一度、ベッドが二つばらばらにおいていないかきょろきょろする。そして、ないことを十回ほど、確かめた後に

恐る恐る赤くなっている氷に聞くのであった。

「・・・・つ、氷さん、もしかしてですね、この部屋にはベッドが一つしかないんですか？」

「ああ、今のところは一つしかないな。」

「ええと、天井が開いて降りてくるとか、床から出てくるとか、はたまた、呪文を唱えたら何もないところから出てくるなんてないんですか？」

「うむ、あれ一つだけだ。」

「・・・・・じゃ、じゃあ・・・僕は誰と寝るんですか？あの怖い熊ですか？」

驟雨は冗談で言ってみた。しかし、生徒会長というものは真面目なもので、外国にいながらもテレビ電話などでこっちの生徒会を仕切っていたぐらいなので、やはり、彼女はまじめであった。

「いや、修君と寝るのはこの私だ。・・・それに、私はあの熊より怖くないから心配しなくて結構だ。・・・それにだね、ええっと・・・君のつ、妻だからな。」

そういわれて驟雨は腰を抜かしてその場に座り込んだ。いや、へたり込んだと言った方が適切かもしれない。驟雨はとりあえず聞いていないこととして話を変えることにした。

「ええっと、トイレの場所とかはどこにあるんですか？出来れば教えてもらえませんか？」

「うむ、トイレはこっちだ。付いて来るといいよ。」

氷の部屋から出て近くのトイレまでやってきた。そして、次はお風呂などの場所も教えてもらった。

「へぇ、お風呂かなりでかいですね？」

「そうだな、二人ではいるのだからこのくらいは大きくないといけないだろうと思ってだな・・・・というのは冗談だ。」

驟雨がちょっと後ろに引いたので氷は違うことを言った。

「・・・・私の家にはたくさんのメイドたちがいるだろう？一応、別のところにもお風呂はあるのだが、こっちは急用のときに使うことが多いんだよ。近頃はもっぱらこっちを使っているがね。」

「はぁ、そんなにメイドさんたちが多いんですね？」

「うむ、驟雨君も気をつけて欲しい。メイドたちに嫌われてしまったら色々と面倒なことに巻き込まれる可能性があるからな。・・・・まぁ、驟雨君をいじめる奴はこの私が許さんがな。」

使命に燃えている氷を驟雨は頼もしく思ったがメイドたちから嫌われることはないだろうとおもっていた。どうせ、学校に行くのだからメイドたちに会わないと思ったからだ。家に帰ってくるのも氷と一緒にしておけば珍しいであろう、メイドたちとほとんど会わない可能性が高いからだ。もっとも、驟雨としてはメイドさんたちを眺めているだけで天国にも昇る気持ちだったのだが・・・・。

「うむ、ではそろそろ、夕食が出来ている頃合だから食べに行こうか？」

「あ、はい。・・・・でも、本当にいいんですか？全くのよそ者の僕が本当にこんな豪華な家に居候させてもらって・・・・。」

氷は頷き、頬を染めた。

「大丈夫だ。私がどんなことが起こっても驟雨君を助けてあげるからな。任せてもらいたい。もっとも、驟雨君ならどんな相手でも勝てるだろうがな。」

堕天使だしな・・・と氷は呟いて笑った。驟雨もつられて笑い、ついでに、変な妄想が頭の中を光の速さでビューンと駆け巡ったのであった。

じゃ、じゃあ・・・・やっぱり僕はこの・・・・ちょっとかたっくるしいところもあるけど・・・頼りになる先輩と・・・・・ラブラブになれるのかな・・・・そうなったら・・・・どうなるんだろう？

しかし、物語というものは様々なことがあるものだ。

とりあえず驟雨はにやけた顔を氷に見られないように努力してみた。もしも、こんな顔を氷が見てしまったら何を考え始めるか分からないからだ。氷は頼りになる会長さんだが、妄想癖もある。驟雨は緩んだ頬をきゅっと引き締め（それは例えるならお相撲さんのまわしを外れてしまわないようにきっちりしているもののようだ。まわしが外れたら大変なことになる）きりっとした顔になるように努力してみた。

「驟雨君、顔がにやけているがどうかしたのか？」

どうやら、僕にはきりっとした顔はできないようだと自己嫌悪した後に氷の妄想が始まる前に適当な言い訳を考えてみた。一つ目、あなたの顔に見とれてました・・・・却下。二つ目、今後のことを考えてしまいました・・・・事実だから却下。最後、メイドさんに手取り足取りご奉仕してもらいたいと思ってます・・・・これは会長が自分でしそうだから却下・・・・。

「ああ、なるほど、そんなに夕食が楽しみなのか！うむ、うちのメイドたちの料理の腕は凄いぞ？期待してもらって嬉しい。」

「え、あ、は、はい！」

どうやら、心配していたことは何もなかったので驟雨はほっとしたのであった。そして、本日は何事もなかったように終わったのであった。これは驟雨がつかれていたおかげであろう。

六、隣の家の白きお姫様

僕がこっちにやってきて一週間ほど経った。
学校は変わっていて今のところは色々と忙しいが何とかがんばっている。まぁ、今のところは氷さんたちが心配しているような自体にはなっておらず、僕の体も大丈夫だ・・・・二重の意味で・・・・。
そして、ある日、僕がたまたま二階の部屋の窓から近くの景色を眺めていた。この家は三階まであり、三階は今のところは何があるか知らない。
さて、空を眺めていると、ふと、隣の家の窓が視界に入った。
何気なしにそこを凝視してしまった。
ちょっと距離があるが、堕天使が埋め込まれてしまった今の僕にはらくらくである。
どうやら、低くなっていた視力も回復させてしまったようだ。堕天使の能力にどことなく、ありがたみを感じながらもその家の中を見ていると、白いドレスのようなパジャマを着ている少女が目に入った。肌は透き通るような白だがどちらかというと病弱といったほうだろう。顔もかわええが、美人薄命といった感じだ。

「・・・・驟雨君、何をしているんだ？」

「のわぁ！な、なんだ・・・・氷さんか・・・・」

氷さんは少しばかり眉をしかめたが、僕に再び聞いてきた。

「驟雨君、何をしているんだ？」

「ああ、ちょっと隣の家に人影が見えたんで探してたんです。」

世間一般ではそれは覗き見というものであろうが、とりあえず、ここはスルーでお願いしたい。

「うむ、君が見たと思うのは多分、月(つき)ちゃんだ。」

「はぁ、成る程・・・・その月ちゃんは何処かからだが悪いんですか？」

「？何でそんなことまで分かったんだ？人影が見えただけなんだろう？」

ちょっとあせった。気分的にはテストでぎりぎり赤点じゃなかった感じだ。

「ええとですね、あっちが手を振っていたようなので・・・・それで、どことなく、顔色が悪かったんでどこか悪いのかなぁと・・・・」

氷さんは何か考えているようだが、とりあえず、納得していただいたようだ。・・・・よかった。

「ああ、月ちゃんは体が悪いんだよ。そうだな、私が小さいころは良く遊んだ気がするが、私がこの土地からいなくなってちょっとしてから体調が良くないらしい・・・・それ以後、一度も外に出たことはないそうだ。彼女としては外で思いっきり遊びたいらしい・・・・まぁ、彼女の友達はいまだ出来ていないらしく、可哀想にな、もう中学三年生なのにな・・・」

どこか、寂しげに言っている氷さんを見ているともしかしたら僕

には関係ないのかもしれないと思ってしまった・・・・・。まぁ、事実、これから一度も顔を合わせないだろうと思ったが、次の日、話していた月ちゃんと出くわすことになったのであった。それは、近くの公園での出来事である。

「・・・はぁ、今日は氷さんがいないからなぁ・・・・ちょっと寂しいかな。」

まるで失恋したような感じで僕は帰り道を寂しく一人で歩いていた。こんな日は公園でブランコを時速百キロぐらいでこぎたい気分だ。・・・・出来るか知らないが・・・・きっと、堕天使なら出来るに違いない。

かばんを持って公園の中に入ると、今日は誰もいないように見えた。どうやら、普段はここにいる小学生たちは家でゲームでもしているようだ。と、そんなことを僕が考えていたときだ。

「・・・・・！」

何かが、何かが聞こえた気がした。そうだな、感じ的にはビームが飛んできたときに○ュータイプがこう、ピピーンって感じるあれですな。うん、ちなみに僕は○ュータイプではありません。

さて、それはいいとして、聞こえてきたのは男子トイレのほうだ。急いでそこに向かう。もしかしたら、不埒なやろうがいたいけない女性を監禁しているかもしれないからだ。く、そんなことは絶対にさせん！僕がしたいほうだ！！・・・・・僕、警察行ったほうがいいな。冗談はさておき、ここだと思ったところを思いっきり開けてみた。

そこには、どこかで見たような小さな少女が震えていただけで、どこにも不埒なやからはいなかった。

「う、う・・・・」

う・・・・・○んこ？いや、違うな。○んちだ。うん、まちがいない。

「うわぁぁぁぁぁん！！」

その女の子は僕に抱きついてきた。意外な行動に驚いた僕はそのまま狭かった公衆トイレの反対側の壁に頭を思いっきり打ち付けたのであった。目から火が出る、ビームが・・・・でなかった。

「ええと、確か・・・・月ちゃんだったかな？何でこんなところにいるのかな？」

ビームは出なかったが、代わりに出た涙を流しながら僕は昨日知った美少女に尋ねたのであった。うん、近くで見るととってもいいね、こんな妹が欲しいな・・・・・義妹でもいいな。

「・・・・ええっと、念願かなってですね、二階の窓から飛び降りることが出来たんです。それでですね、監視さんの目を盗んで公園に遊びに来たんです。」

こりゃまた、行動的なお姫様だ。勇者が倒そうとしていた魔王を先に倒して勇者を待っていそうだ。

「・・・・それで、何でここにいたのかな？」

「・・・・そしたら、誰もいなくて・・・・帰ろうとしたら・・・とっても大きな犬さんがいてですね、襲い掛かってきたんです。」

きっとその犬は月ちゃんと遊びたかったんだろう、僕だって犬の立場だったら加えてどこかに大切に保管するかもしれない。しかし、こんなくわぁいい、お姫様をおびえさせるなんてどこの犬だ？この僕が月ちゃんに代わってお仕置きしてあげたいものだ。

「・・・ええと、危ないから月ちゃん、お家に帰ってほうがいいよ？今度は犬じゃなくて変質者に追っかけられるかもしれないからね？ほら、もう大丈夫だから、ね？」

素直でいいこなお姫様だと思っていた僕の予想は外れてしまった。何故なら、月ちゃんは首を振ったのだ。千切れるんじゃないかといった感じだ。

「・・・・・嫌・・・です。まだ、誰とも遊んでいません。」

「でも、今日は他の人たちは誰もいないよ。それに、君は体が悪いんでしょ？無理をしてはいけないよ？」

優しいお兄さん風に言ってみたが、月ちゃんは頑として受け入れてくれなった。・・・・うぅむ、そこまでして遊びたいのか？

「・・・・ほら、わがまま言っちゃ駄目だよ？遊ぶ人もいないんだしさ？」

「遊ぶ人なら・・・・いるじゃないですか？」

「どこに？」

「ここに！」

彼女が自信満々に指差すほうには僕の鼻があった。・・・・・僕をご氏名ですか？

「・・・・・ごめんね、僕は忙しいんだよ。」

うん、義妹には優しくしたいが・・・・おにいちゃんは色々と忙しいんだよ？だが、というかやはり、月ちゃんは僕に馬乗りになったまま、その綺麗な瞳に僕を捕らえている。他人にこんなところを見られたら僕が襲われているように見えるだろうか？ぜひとも、そう見えて欲しい・・・・・。

「・・・・お願いしますです！！」

こんな可愛い子に『お願い！！』をされるのはあと、何回だろうか？

「・・・わかったよ。僕の負けだ。好きにしてくれ・・・・。」

僕の上から軽かった体重が消えた、そして、今度は右腕を誰かが引っ張っている。

「おままごと、して下さいです！！」

古代兵器二

七、帰るところがないがな！！

砂場にて、僕と月ちゃんの新婚生活が始まってしまった。

「はい、みそじるとごはんです！！」

み、みそじるぅ？味噌汁のことかな・・・・？ええっと、おままごとなんてしたことないから分からないけど・・・・どうしたらいいのかな？しかも、おままごとなんてこのこの年でするものなのだろうか？

「・・・・う、うん・・・ありがと・・・」

どこから集めてきたか知らないが・・・・空の食器を僕は受け取って飲むまねをする。

「どうです？」

「うん、うまいよ？」

そして、新婚さんにはありがちな夫さんの会社への旅立ち・・・・の前にある、お別れのキス・・・・。

「ん～！！」

「いや、ちょっとまったぁ！！」

近づいてくる月ちゃんの肩を抑える。しかし、彼女の進軍は止ま

らない。

「ほ、ほら、ちょっと落ち着いて、ね？」

「む～！なんでですか？」

あ、膨れた顔も可愛いなぁ・・・そうじゃなくてだ！

「ほら、今日はもう暗いから、続きは今度しようよ？」

僕が言っていることは嘘ではない。既に太陽は墜落寸前であり、それにともなってあたりは暗くなっている。しかし、トイレにいたころの表情になってしまった月ちゃんは再び、僕を見てきた。

「・・・・嫌、です！！どうせ、家の皆みたいにまた、嘘つきます！！」

ぐ、なんて鋭い子なんだ・・・・はぁ、こうなったら約束をするしかないな・・・・。

「大丈夫、僕は嘘をつかないよ。それに、僕は君の隣の家に住んでるからね・・・・。大丈夫！嘘だと思うんなら、指きりでもしてあげるよ？」

軽く言ったのだが、どうやら月ちゃんは重大な意味として受け取ったらしい・・・目が真剣だ。

「・・・嘘、つかないで欲しいですよ？」

「うん、指きりげんまん！」

「嘘ついたら押し倒す！！」

お、押し倒す？

「ゆ、指きった！！」

月ちゃんはその白い顔にも太陽みたいな笑みを浮かべて僕を見てくれた。あ～あ、僕の妹もこんな子だったらいいのになぁ・・・・。

「さ、途中まで一緒だから帰ろうか？」

「うん！！お願いしますです！！」

さて、氷さんの家まで帰ってきたのはいいのだが・・・・なんと、隣の家の月ちゃんの家には電気がともっていなかった。どこかに出かけたのだろうか？

「月ちゃん、皆いないみたいだね？」

「うん、何でですかね？」

とりあえず、氷さんが帰ってきていることを祈って家に入ってみる。氷さんの家にはメイドさんたちが多いが、いまだに僕は誰一人の名前を覚えきれていない。

「お帰りなさいませ、驟雨様。」

「あ、ただいま帰りました・・・」

一人のメイドさんは僕になんだか物言いたげな顔をして去っていった。ううむ、どこか、おかしいところがあっただろうか？

「お兄さん、驟雨って名前なの？」

「え、そうだよ？」

いまさらだが、名乗っていなかったことに気がついた。ま、それはおいおいとして、近くを歩いていたメイドさんの一人に話しかける。

「あ、すいません、氷さんは帰ってきてますか？」

一瞬、メイドさんは僕を珍しいような顔で見たが・・・再び、感情を表に出さない顔になって告げた。

「はい、帰ってきてますよ。驟雨様を探しておりました。」

「あ、どうもご親切にありがとうございます。」

再び、メイドさんは僕に不思議そうな顔を向けたのであった。ああ、多分、僕がつきちゃんと一緒にいるからそんなに不思議そうな顔をしているのだろうと勝手に解釈して氷さんの部屋に月ちゃんと一緒に向かったのであった。

部屋には氷さんが普段着姿でベッドに腰掛けていた。その顔は何か、考えているようでもある。

「あ、驟雨君、心配してたぞ？誰かに襲われたのか本当に心配だったんだぞ？」

その顔は既に泣きそうであった。僕は慌てて何があったのかを口早に氷さんに伝えたのであった。しかし、何かを勘違いしたのか、氷さんの顔は青い。

「・・・・つまり、驟雨君が公園で隣の家の月ちゃんをトイレに連れ込み、夜のおままごとをしたと？」

「いえ、全く違います。公園で月ちゃんをトイレで見つけて、夜になるまでおままごとをしていたんです。」

氷さんは再び考え事をし始め、顔を赤くし煙を噴出し、平常の顔に戻った。

「あ～、すまん、驟雨君。私がちょっと勘違いしていたようだ。すまなかった。」

「いえ、かまいませんよ。こんな時間まで遊んでいた僕が悪いんです。それで、そのぉ・・・月ちゃんの家族が帰ってくるまで、ここにいさせてはいけませんか？」

氷さんはうなずいてくれた。

「月ちゃん、私のことは覚えているかな？」

「はい、氷さんですよね？小さいころに色々とを遊んでもらっていたのを覚えています。」

それ以後、夕食となるまで彼女たちは昔話に花を咲かせ、その花が散るまでずっと話をしていたのであった。と、そんなときに部屋の電話が鳴ったのであった。

「あ、家の人が帰ってきたのかもしれませんよ？」

「うむ、ちょっと待っててくれないかな？」

氷さんがその電話を取って受け答えをしている間、僕は月ちゃんと話しをしていたのであった。

「ねぇ、驟雨さんって私と会ったことある？」

「う～ん、ないよ。」

そんな話をしていると、氷さんが真剣な顔をしてこっちにやってきた。・・・そんなシリアスな顔はやめて欲しい。どうせろくでもないことが起こりそうだからである。

古代兵器三

八、月パパ驟雨

氷さんに部屋の外に呼ばれた。月ちゃんはベッドに寝転がっており、既にうとうとし始めている。

「・・・大変なことが起きた。」

やっぱりですか・・・・・あなたのそんな顔を見ていると僕はとっても不安な気持ちになりますよ。気分的には船のそこに穴が開いた挙句、目の前に海竜が飛び出てきている感覚です。

「月ちゃんの家族が捕まった！！」

海竜の群れに直撃した気分です、はい。

「な、なんでですか？」

「・・・どうやら、月ちゃんの家族は世界的な泥棒だったらしく、あらゆる物を盗んできたそうだ・・・・しかし、とうとう年貢の納め時だったらしく、役所に忍び込んだときに捕まったらしい・・・。」

はは、笑っていいところなのか？僕が黙っていると、今度は氷さんが僕の目を真剣な目で見ていた。そ、そんな目で見られるとっても緊張します！

「で、警察が君を呼んだそうだ。」

「うぇぇ！なんでですか！」

「正確に言うと、空（そら）　一騎（いっき）さん・・・・月ちゃんのお父さんが君を呼んでいるらしい。」

そして、僕は氷さんに付き添われて警察に行ったのであった。なんだか、悪い事をしていた気分だ。自首か？僕は今から自首でもするのであろうか？

「・・・・やぁ、はじめまして、驟雨君。」

「あ、どうも・・・・」

どこからどう見ても、人のよさそうな人物であり、泥棒と言うより、どこか、被害者側のような感じのする人物であった。近くには、警察の人がおり、なにやらノートに書き込んでいる。

「・・・さて、話をする前に・・・ちょっとこの監視さんには眠ってもらおうかな？」

一騎さんが指をぱちんと鳴らすと、警察の人は机に突っ伏し、カメラは変な音を出し始めた。

「・・・驟雨君、私が刑務所から出てくるまで、月を引き取ってもらえないだろうか？」

「・・・え！？」

驚いた。非常に驚いた。男だと思っていた友達が実は女だったといわれるぐらいに驚いてしまった。と、僕が黙っていると一騎さん

は話を進め始めた。

「・・・実はな、月は私の子どもではないんだ・・・。私が月と会ったとき・・・それはな、とある人物・・・伏せる必要がないので言わせてもらうが、君のお父上と一緒にとある遺跡に忍び込んだときだ。」

って、おい、僕の父親は実は泥棒だったのか？じゃあ、捕まるべきじゃないのか？

「・・・とても興味深い遺跡だったらしいが・・・私は金目の物を手当たりしだいとは言わないが・・・・右のポケットに入れるだけ、入れることにしたのだよ・・・。君のお父上は何かに取り付かれたかのように遺跡の文字を解読していたな。それでだ、彼が何かを唱えると・・・・天窓から美しい、月の光が差し込んで遺跡の中央にある空のゆりかごに赤ん坊が現れたんだ。」

うわ、そりゃ凄いや・・・・。

「・・・君のお父上はその赤ん坊を見ていたが・・・興味を失ったらしく、抱きかかえ、私に育てるように命じたのであった。それで、私はその子を月と名づけ、育てていたのだよ。・・・・そうだな、氷ちゃんが外国に行ったときに月についてわかったことがあったんだ。」

氷さんがいなくなり、月ちゃんが外に出れなくなったわけがこれから、話されようとしていた。僕はそれを直感的に気づき、黙って一騎さんの顔を見た。

「・・・・月はな、実は地球を侵略しに来た宇宙人だったんだ！！」

「・・・・は？」

力をこめてそういった一騎さんの顔をまじまじと眺め病院に電話するべきかと考えた。月ちゃんが宇宙人？ありえないだろう・・・・。

「ええと、根拠になるものでもあるんですか？」

「ああ、実はな、月を正確に表現するとだ・・・古代兵器だ。」

「・・・・は？」

古代兵器？なんじゃそりゃ？何かの冗談だろうか？

「・・・・おっと、これ以上のことは君の父上から他言無用でな、月のことを知りたければ、君のバックにいる巨大な組織に調べてもらうといい・・・・そうだな、月は太陽の光を受ければ受けるほど・・・・」

「どうなるんです？」

「世界を滅ぼすぐらいの力を手にすることとなるだろう・・・・」

こりゃまた、すんごい話となってきた。いつの間にか、世界というのはおままごとが好きだろうと思われる女の子にでも滅ぼすことが可能となっていたらしい・・・・。

「では、もっと知りたいなら君たちで調べてみてくれたまえ！」

外では、氷さんが待っており、何かを知った感じであった。その目は、僕に何か聞きたげであった。

「・・・・驟雨君、教授から電話があったのだが、古代兵器む～んとは何だ？」

多分、月ちゃんのことなんだろう・・・・いや、認めたくないな。

「・・・・ええっとですね、一騎さんからもそんな話をされました。・・・聞いた話では月ちゃんのことらしいですよ。それでですね、詳しく知りたいなら自分たちで調べろといわれました。」

氷さんは狸に化かされたような顔になり僕の顔をまじまじと眺めていた。

「・・・・そうか、ならば・・・・佐薙あたりに調べてもらおう。」

「そうですね・・・僕も色々とがんばってみます。あ、一騎さんが月ちゃんを悪いけどお世話して欲しいといってました。」

「うむ、そのくらいお安い御用だ。」

二人して、狸と狐に騙されたような顔で帰宅。迎えてくれた月ちゃんはちょっと不満そうな顔であった。

「むぅ、私だけ仲間はずれなんてひどいですよ、驟雨さん！！」

「あ、ごめんね。ちょっと君のお父さんから呼ばれてたんだよ。」

氷さんが僕の前に出て事情を説明し始めた。

「・・・・なるほど、私は今度から驟雨さんの子どもですね？」

「そうだ、君は今日から私と驟雨君の子どもだよ？」

「ちょっと、何を言っているんですか、氷さん！！」

「驟雨パパぁ！！」

月ちゃんにタックルされ、僕はしりもちをついた。そんな僕たちを氷さんはほほえましい顔で見てらっしゃる・・・・。一騎さん、早く、戻ってきてください。脱獄でも何でもいいから、今すぐにでも、よろしくお願いします・・・・。

古代兵器四

九、調査結果

昨日、あれから散々、月ちゃんに甘えられ・・・・僕の精神は色々と限界を迎えそうになった。

氷さんの大きなベッドには三人で寝ることとなり、右が氷さんで真ん中が月ちゃん、左が僕といった感じで寝ていたのだが・・・・起きたときには何故か、氷さんが僕の左におり、月ちゃんが僕の上に乗っていた。寝相、悪いなこの二人・・・・氷さんにいたってはパジャマがはだけている。いや、そんなにじっくりは見てないけどね・・・。

そして、学校も放課後を無事終え、僕は今、生徒会室にいる。

「・・・・古代兵器む～ん？」

「うん、知らないかな、佐薙さん。」

相談を持ちかけたのは情報担当だといっていた佐薙さんだった。まぁ、氷さんが言っておくといったが、彼女は今、先生に呼ばれてこの場にいなかった。僕は代わりに佐薙さんに昨日、一騎さんから聞いた話しの一部を伝えたのであった。

「・・・・調べておくわ。」

「うん、ありがとう。」

佐薙さんは頷いて家に帰る準備を始めた。どうやら、今から調べてくれるらしい・・・・その目には何か面白いものを見つけたよう

な感じの子どもの目であった。生徒会室のドアを開けて去っていった。と、入れ替わりに誰かがやってきた。

「・・・なんだ、貴様か。」

「どうも、靱さん。」

入ってきたのは靱さんであった。いつものようにその目は冷凍食品のように冷たい。だれか、この人の電子レンジになるような人はいないだろうか？

「・・・・あ、靱さんは古代兵器む～んって知ってるかな？」

「・・・・なんだそのふざけた名前は？私は知らないな。それに、貴様のように暇でもないから、そんな平気を知りたいなら専門家に聞けばよかろう？」

「・・・専門家？ああ、鎧王さんか！ありがとう、靱さん。」

靱さんはだまって荷物を持つと部屋を出て行った。

まぁ、全然あれから進歩がないが・・・今は鎧王さんを探すほうが先決だ。

さて、あの人はどこにいるだろう・・・・。生徒会の日別仕事表を見てみると、今日の鎧王さんの仕事はなんと、特殊訓練であった。・・・・生徒会ってこんなことも仕事のうちに入るのだろうか？ちなみに場所は、学校の裏山にある滝らしい・・・・これ、どう考えても精神修行じゃないのか？どうせ、滝に撃たれているんじゃないかな？

学校の裏山にやってきて滝を探していると、何かの声が聞こえた。

「・・・・バスガス爆発！バスガス爆発！バス・・・・」

声のしたほうにいってみると、思ったとおり、鎧王さんは滝に打たれていたのであった。水浴びにはまだ、早いだろうに・・・・・それに、先ほどから早口を言葉を震える唇で喋っている。・・・・・なるほど、これが特殊訓練って奴かな？

「・・・・驟雨ではないか？お前も訓練にやってきたのか？」

僕に気がついた鎧王さんは寒そうな顔をせずに僕に歩み寄ってきた。彼女は普通に制服で滝に打たれていたので、制服が透けていて、なんだか得した気分だ。ラッキー？

「鎧王さん、古代兵器む～んって、知ってますか？」

「古代兵器・・・む～ん？」

どこか知ってそうな顔を数秒すると、ひらめいたような顔になった。

「うぅむ、意外と驟雨もマニアックなのだな・・・・私は嬉しいぞ？初めてだ。こんなマニアックな武器の名前を知っていた人間はな。」

僕の両肩を掴んで前に後ろに振りまくった。そして、顔は満面の笑みを浮かべており、というか、彼女のこんな顔を見たのははじめてである。

「・・・で、一体全体、古代兵器む～んって何ですか？」

「おお、知りたいことはいいことだ。驟雨、お前が知っているのはどこまでだ？」

昨日、一騎さんに教えられたところまで話す。

「・・・なるほど、驟雨が知っているのは太陽の光をあたっていると、徐々に力が解放されるというところまでか・・・・じゃあ、私が昔話をしてやろう。」

おばあさんが孫に昔話をするかのように鎧王さんは語り始めた。

昔、今からどれだけ昔かは分からないが・・・・地球を完璧な惑星だと思った宇宙人は地球を征服しようと考えた・・・。
それで、数人の宇宙人が地球に降り立ったのだが、ここで、宇宙人の仲間割れが勃発・・・・同種族の仲間割れは彼らの軍事秘密である、兵器を使用し始めた。
そして、それをほほえましく眺めていた地球人の仲介により、宇宙人は仲間割れを終結に導いた。
すでに、侵略するだけの戦力が残っていなかった宇宙人は撤退を始め、お世話になった地球人たちにささやかなお礼として使うことのなかった兵器を譲渡したのであった。譲渡された兵器の使用法など知る由もなかった地球人はとりあえずそれをどこかの遺跡に保管したのであった。時間差で、取扱説明書が地球人の元に送られてきてとりあえず、それも同じところに保管したのであった・・・・・。

話し終えて、鎧王さんはため息をついた。

「・・・・それでだ、私も古代兵器を探しにいろいろと探し回ったんだが・・・・残念ながら、すでに誰かが持ち去った後であった。」

その目は、本当に残念そうであり、月ちゃんがそれだと気がついたら氷さんの家から盗み出そうとするに違いない。まぁ、既に盗み出されたんだけれど・・・・

「・・・・ぜひとも、戦力強化として手に入れておきたかった。まぁ、そんなわけで、古代兵器は私が調べた結果、成長するとのことだ。驟雨、どうだ、ためになったか？」

「ええ、非常に役に立ちました。また、何か困ったときは聞きに来ていいですか？」

「ああ、私としても下のものには博学であってもらいたいからな・・・・ちゃんと、訓練と自己管理をきちんとしろよ？」

そういって、鎧王さんから聞いたことをまとめると、月ちゃんは進化する兵器だということを知った。

「あ、驟雨パパ！！」

学校を出ようとすると、なんと、月ちゃんがいた。満面の笑みを浮かべてこっちに走ってきている。・・・・おかしい、誰にも生徒会室に行くとか言ってないのに・・・・

「月ちゃん、何で僕がここにいるって分かったの？」

「うんとですね、パパさんがいるところが頭の中に地図みたいなものが出てきて印があって・・・・うぅんと・・・・」

どうやら、この子にはレーダー機能でもついているらしい・・・・

支離滅裂で何を言っているか分からなかったが・・・・それだけを理解することが僕にはできた。外には落ちかけだが、太陽が未だに強烈に光っており、これはもう、太陽の影響を受けるのは間違いないようだ。

「パパさん、帰って遊ぶです！！」

「うん、そうだね・・・・そうしようか？」

右腕を引っ張る彼女の腕の力は物凄い。そして、肌は色白だが、病弱の感じはなくなってきている。

「さて、何をしようか？」

「ううぅんとですね、昨日の続きがいいです。」

「・・・・できればそれは遠慮したいな・・・・」

一緒に夕暮れを見上げる。

・・・・まぁ、今になって思うが、どうやら僕たちは誰かに見張られていたようだ・・・・その日の夜、月ちゃんは何者かに連れさらわれてしまったのであった。そして、僕は宇宙人との戦いの中心となってしまう予定だったらしい・・・・その宇宙人が、たこみたいな姿ならなおさら良かっただろうが・・・・相手は残念なことにイカの形をしていた。

古代兵器五

十、イカＶＳ生徒会

「・・・・驟雨君、大丈夫か？」

「ええ、まだぴんぴんしてますよ。しかし・・・・月にはウサギとイカが住んでいたんですね？びっくりしましたよ。」

ちょっと話はさかのぼる。宇宙人のイカたちに月ちゃんが誘拐されてしまった。まさか、晩御飯のイカの刺身がいきなり動き出すとは予想をはるかに超えていた・・・・。正直、トラウマになりそうだ。まぁ、白い足で月ちゃんを絡めとると、イカは僕たちにこういって去っていった。

「・・・・長かった・・・・月をウサギとかけて勝負したことが昨日のように思えるぐらいだ・・・・ウサギたちを倒してしまえば、昔来たことのある地球など、侵略はたやすいからな・・・・お前たち、この娘を返してもらいたいならわれわれと地球をかけて勝負しろ。場所はこの近くの学校だ。」

と言うことだ。

そして、僕と氷さん、そして生徒会のメンバーたち（それぞれ、事情があって参加）が打倒イカを掲げて学校の校門前にやってきて、それぞれ分かれて戦闘を始めたのであった。

僕と氷さんは右から学校内を攻めている。そして、約半分まで攻め入ることに成功していた。ちなみに、武器は氷さんが家にあった包丁で、僕は後方援護として鎧王さんと靱さんから借りた麻酔銃だ。彼女たちは普通にイカのことを食料と思っているらしく、麻酔銃に

倒れてしまったイカたちをビニール袋に入れているのを先ほど、見かけた。

「鎧王、一匹たりとも逃すな！！」

「了解！！」

「きゃぁ！！触手、気持ち悪いよぉ！」

「柵木さん、大丈夫です。」

「くそぉ！！全員、撤退だ！！」

「ま、回り込まれてるぞ！！」

「ぐ、ぐぁぁぁぁ！！」

そんなやり取りが向こうから聞こえてくる。

ここのイカは普通に喋っているから怖い。まぁ、それを除けば普通のイカとの違いなそう、ないのではないかと思われる。まぁ、種類がさまざまあって、発光していたりするものもいた。彼らの標準装備はイカ墨らしく、今のところは宇宙人っぽい武器なんかは出ていない。・・・・多分、地球人を馬鹿にしていたのだろう・・・。

「・・・・驟雨君、危ない！！」

僕のもとに一匹のイカが突進を開始・・・・。

「・・・・ガンダ〇ちゃん、後は頼んだよ！！」

そういって突っ込んできたイカを僕はさらりと避けて麻酔銃を打ち込む。途端、空を飛んでいたイカはべちゃりと廊下に落ちた。そ

して、ピクリとも動かなくなる。

「・・・氷さん、助かりました。」

「なに、当然のことをしたまでだ。」

ここで言っておくが、イカ墨はどうやら特別せいのものらしく、ついたら、取れなくなってしまうようだ。

「・・・・・よし、驟雨君、援護射撃は任せたぞ？」

「はい！わかってます！！」

イカがたむろしている廊下に一人で入り込んだ氷さんはイカをさばき始める。そして、僕はできるだけイカが集まっているところに銃をぶっ放す。

「侵入者を始末せよ！！」

「捕まるな、連中はわれらをてんぷらにする気だ！！」

数分後、氷さんが持っている包丁は相手の返り墨？を浴びて真っ黒に染まっていた。

「よし、今入った連絡では旧校舎は占拠したそうだ。後は、人質の奪回。それだけだぞ、驟雨君。」

「ええ、そうですね、どうやら、屋上に刺身になっていたイカはいるようですね？」

未だに、月ちゃんをさらって行ったイカとは会っていない・・・・つまり、奴が首領ということになり、自ら率先して刺身になって僕たちの隙を狙っていたに違いない・・・・しかし、なぜ、僕たちを選んだのだろうか？

「・・・行くぞ、驟雨君！！」

「ええ、行きましょう！！」

屋上の扉を開けると、月見でもしたくなるような大きくて青い満月が僕たちの目の前に姿を現していた。そして、屋上の真ん中にはイカと縛られている月ちゃんがいた。

「・・・くくく、ここまでくるとは相当、強いようだな？流石はむ～んに選ばれることはある。」

「・・・後はお前だけだ、観念したらどうなんだ？」

氷さんは蒼月をバックにたたずんでいるイカに向かってそういった。

「私たちの晩御飯のおかずのくせして生意気だぞ？」

「ふん、観念するのはそっちだ！今からお前たちに面白いものを見せてやる！！」

僕はイカが空を飛んでいるだけで十分、面白いと思うのだが？

「・・・えい！！」

バキュン！

僕は思う、ゲームのラスボスなど、そこいらの連中は御託を並べるが、勇者もそう、待っていてはくれないだろう・・・・。

「ぐ、まだだ、まだ終わらんよ！！」

「せりゃ！！」

ばばばばばばばばばばば！！

僕が持っているありったけの麻酔銃をイカに打ち込んだ。氷さんはその隙に月ちゃんを救助。イカは力を失ったのか、その場に落ちて盛大ないびきをかき始めた。

これで終わりに思えたが、月から何かが降ってきた。そして、僕たちの目の前にそれは着陸。なかから、ウサギが出てきた。何、これ？

「・・・・あの、氷さん、このウサギさんたちはどこから来たと思いますか？」

「・・・月ではないか？」

茫然自失といった調子で、そのウサギたちを見ていると、一匹のウサギが僕たちの前に立った。二本足で・・・・。

「どうも、私たちは見てのとおり、ウサギと申します。出身は月です。」

「あ、これはご親切にどうも・・・・・坂凪　驟雨といいます。こちらは、冬野　氷さんです。」

ぺこりとお辞儀したウサギに向かって僕たちは頭を下げた。なんて礼儀正しいウサギなのだろうか？

「・・・イカたちが月を征服していましたが、私たちは自力で彼らを迎撃することに成功しました。」

ウサギたちはところどころ、白い毛が黒く染まっていた。

「・・・・そしてですね、私たちは地球に残していた忘れ物を取りに来たのです・・・。」

ウサギの長い耳が月ちゃんを指差す。そして、僕と氷さんはどうするべきかと悩んで向き合うのであった。さて、ここは渡したほうがいいのだろうか、それとも、このウサギたちも鎧王さんたちに渡すべきであろうか？

古代兵器六（前書き）

古代兵器編の最後です。

古代兵器六

十一、満月にさらば・・・・

ウサギたちにもう一度、月ちゃんが地球にやってきた経路を鎧王さんよりも詳しく話してもらった。

「・・・まぁ、当然のように、地球人には文字が理解できず、それには月光に当たったらその兵器は起動すると書かれていたのです。しかし、彼らは太陽が出ている間に日のあたらない遺跡の中にそれを封印したのです。」

「はぁ、なるほど・・・・・。」

ウサギが立ち話をしながら、人間と話している・・・・・そんな現実はイヤだ・・・。

「・・・・まぁ、後、数分でこの子は力のほとんどを解放させ、地球を滅ぼします。」

「・・・・・冗談ですよね?」

「はい、冗談です。」

なんて、ウサギだろうか?冗談にもほどがある。と、ここで氷さんが話しに入ってきた。

「・・・つまり、月ちゃんたちの本当のお母さんやお父さんたちはあなたたちにあたると?」

「ええ、そうなりますね。」

氷さんは何事か考えると、頷いて、月ちゃんをウサギに渡したのであった。僕がびっくりしてそれを見ていると、悲しそうな顔で僕に告げたのであった。

「驟雨君、月ちゃんはやっぱり、真実を知るべきだと思うんだ。それにな、会おうと思えば、また会えるよ。」

「・・・・そう、ですか・・・」

ウサギたちは僕たちが話している間にさっさと帰っていってしまった。・・・・・まぁ、どこかできっと会えるかもしれないから・・・今はしょうがないのかもしれない。と、僕としてはこのまま綺麗に終わりたかったのだが・・・・校舎の中から煙のにおいがしたので再び、氷さんと顔を見合せた。

「・・・・驟雨君、まさかとは思うが・・・・」

「・・・ええ、きっとあの人たちが捕虜たちを焼きイカにしようとしているんじゃないんでしょうか?」

もしも、校舎内部でやっていたらそれはもう、ただではおかない。僕は満月を眺めて、また、いつか会えるだろうと思って、手を振るのをやめた。

こうして、かなり短い間だったが、僕は月ちゃんのお父さんであった。

「どうも皆様、坂凪　驟雨です。」

「生徒会長、冬野　氷だ。」

「ええと、作者が気がつくのが遅くなったため、十回記念が遅くなってしまいました！！」

「これはもう、失態というしかないな・・・・全く、何をやっているんだか・・・。」

「さて、それはさておき、ちょっと順番が違っており・・・・分かりづらいところも何箇所かあったと思います、すいませんでした。」

「まぁ、それはいいとして、この話には後日談がある。まぁ、十回記念としてもしも驟雨君があの後、月ちゃんに公園で再び会ったらどうなるか、行ってみようじゃないか！しかし・・・・あんまり、コメディーっぽくないと思うのは私だけか？驟雨君、この終わり方はあくまで、もしもだからね？」

「はい、わかってますって、氷さん・・・・」

あれから数日、僕は毎日のように月ちゃんに出会った公園にやってきている。しかし、当然なのか、月ちゃんに出会うことはなかった。

「・・・・せめて、最後にさよならぐらいはやっぱり言っておきたかったよ。」

涙が、僕の頬を伝ってまるで濁流のように流れ落ちる。

「驟雨さん、何をそんなに泣いているんですか？」

どこかで聞いたような声を聞き、僕ははっとなって後ろを振り返る。そこには、月ちゃんが微笑んで立っていた。

「つ、月ちゃん？」

「はい、そうですよ、驟雨さん・・・・。また、遊びに来ました！！」

月ちゃんは僕に抱きついて、離れようとしなかった。いつかのように彼女は僕の体に馬乗りになっていた。目の前にある彼女の顔は涙を流していた。

「・・・・全く、イカさんに誘拐されて気を失ったと思ったら今度はウサギさんに連れて行かれているなんてびっくりしたんですよ？別れの挨拶ぐらい、してくれたっていいじゃないですか？」

「・・・ごめん。」

「・・・・・驟雨さん、あの時の・・・・続きを一緒にしましょう？」

「・・・・しなくていいよ。」

「・・・・なんでです？」

「多分、後十年後以内にはきっと、現実になってると思うからね？」

古代兵器　～完～

「あ～、白々しい・・・・驟雨君のキザやろー！！ロリコン！！一回、刺身にされちまぇ！！これがｉｆってやつですか？けっ、何考えてんだ？おぉ、なんじゃそりゃ？何で第一回目のＥＮＤがどこぞのお姫様じゃ？ああん、こら？」

「うわ、氷さんが壊れた！！あ、今度は通行人に絡み始めちゃった・・・・まぁ、大丈夫だと思いますので、今後の予定を話したいと思います。今後は、やっとというか、なんというか、学校の話になると思います。これからも、よろしくお願いします！」

「くそ、第二のＥＮＤこそ、この私にぃ！！」

「・・・・ええと、僕が学校に行く、ちょっと前の話をどうぞ・・・・」

僕の目の前には、豪華な料理がずらりと並んでいる。これまた、ものすごい量だ。

「さぁ、早く食べたまえ、驟雨君。」

「きょ、恐縮です。ええっと、いただきます。」

「・・・・いただきます。」

昨日、疲れていたのか知らないが、ぐっすり眠ることができた。その時間、僕がベッドに入って約一分・・・・氷さんが僕の隣に来る前に、ぼくは既に夢の世界に光の速さで到達していた。そして、少しばかり不機嫌な氷さんに起こされて彼女の父親と一緒に朝食の

席となった。しかし、朝からこんな豪華な料理を食べれるなんて、本当にこのお父さんは金持ちなんだな？

「驟雨君、どれも私が自分で栽培したりしたものだよ。」

「す、凄いですね・・・・」

「まぁ、君も今日から学校だろうからね、ぜひとも、がんばってくれたまえ！」

とりあえず、無理しない量だけ食べ終えて、僕は氷さんとともに学校に向かって歩き出した。はじめは、車で来たが、僕としてはそこまで距離を感じなかったので歩いていくことにした。

「・・・・驟雨君、私たちの学校はな、色々と古いところもあったりするのだよ、それで、だ、理不尽だが、そのルールに従ってもらいたい。」

「はぁ、わかりました。」

こうして、僕のどきどきの学校生活は幕を開けたのである。

ガァァッコォウ！

十二、

「驟雨君、私がついてこれるのはここまでだ、先生はあの女の先生だからね？」

職員室の前にて、僕は氷さんから僕のクラスとその担任教師を教えてもらった。氷さんは三年二組なので、会うことはないだろう・・・・。僕がお礼を言って、職員室に入ろうとすると・・・・

「・・・・驟雨君。話しておきたいことがある。」

真剣そうに僕の名前を呼ぶ、氷さん。ま、まさか・・・この学校にも凶悪な番長でもいるのだろうか？

「・・・う、浮気をしたら許さないぞ？そこのところは忘れないでくれよ。」

そういってまだ、全く人気のない廊下を光の翼を生やして去っていった。・・・・できれば、真面目な話のときにだけ、真剣な顔してください。その思いつめた表情は僕を精神的に追い詰めます・・・・。

「・・・・はぁ、ま、しょうがないや・・・失礼します。」

職員室の扉を開けて、担任の先生だといわれた女性に近づく。まぁ、他に先生の数は少ないので挨拶もそこそこで先生の下にたどり着いた。

「・・・おや、君が今度転校してきた坂凪　驟雨君かな？」

「はい、そうです。これから、よろしくお願いします。」

先生はしげしげと僕の顔を眺め、ふぅむと二回程うなった。・・・・まるで、獲物を見るような感じだ。

「・・・うん、まぁ、合格ってとこだね・・・ついといで、君のクラスを紹介するよ。」

「はぁ、わかりました。」

先生は自己紹介などせず、びしっと決まったスーツ姿で僕の前を歩き出した。先生は長髪なので、後ろから見ると、井戸から出てきそうなお化けに見える。

「・・・ここだよ、今日から君のクラスは一年三組だ。」

先生は腕時計をちらりと見て、再びふぅむとうなったのであった。・・・・・なんだ、何か僕の顔にはついているのか？

「さ、入って入って。色々とこの学校について教えておかないといけないからね。」

「はぁ、ありがとうございます。」

先生に後ろから押されながら、僕は教室の中に入った。中は綺麗に整理されており、まだ、時間が早いせいか、誰も登校してきていない。

「・・・・ええとね、まずは私の名前から紹介させてもらうよ。私の名前は差林（さばやし）榊（さかき）。歳は偽り続けた結果、今のところは十六歳ってところかな。趣味は色々なことを学ぶことで、嫌いなことは嘘。好きな食べ物は果物全般で嫌いな食べ物は特になし！自慢できそうなことは、一度も虫歯になったことがないってところかな？あ、君は転校生だから、一応、何かあったときのために私の家の住所と携帯電話の番号を教えておくよ。」

準備していたとしか思えないほどの綺麗な自己紹介（多分、年齢は十六歳でも通じると思われる。）と、懐からの個人情報。・・・・熱血の先生なのかもしれない。僕が黙ってそれを受け取ると、今度は僕の目をしっかりと見据えてきた。

「・・・坂凪君、念のため、携帯の番号を教えておいてくれないかな？住所はもうしってるから。」

「はぁ、わかりました。」

僕は携帯の番号を先生に告げた。それが終わると、先生はにこりと笑って、腕時計をちらりと見た。ちょっと、眉をひそめあせった表情を見せた。あ、意外と可愛い・・・・。

「・・・ち、そろそろタイムアップかな？」

「？何がですか・・・。」

僕がそういうと、急に廊下のほうから音がしだした。どたどたどたどた・・・と、そんな音が聞こえてくる。そして、教室後ろ側のドアが勢いよく、開け放たれた。

「あ、みんな、転校生が本当に来てるよ！！」

「え、うそぉ！先生が昨日言っていたことは本当だったんだぁ！！」

「へぇ～どんな奴？」

途端、騒がしくなっていく教室。段々と僕の前にはこの学校の生徒であろう、人物たちがやってくる。く、囲まれた！！まるで、タマが切れた銃を持ってゾンビに囲まれてしまった気分だ。しかも、やってきたのは全て女子・・・選り取り見取り？いや、どれもどうやら、僕にとっては高嶺の花のようだ・・・・。

「いやぁ、仲間が一人増えて嬉しいよ。」

どうやら、一人例外が混ざっていたようだ。いつのまにか、僕の目の前に男子生徒が一人だけ、立っていた。その目は、すべてを見透かせそうな雰囲気を持っている。きゃ、エッチ！

「・・・・先生、そろそろホームルームを始めたらどうですか？既に、この教室の全員が登校してきています。」

「・・・・そうだね、私としては坂凪君と夜遅くまで教室で語り合っていたかったけど・・・邪魔が入ったんじゃ、しょうがない。さ、みんな、坂凪君に触らないでさっさと席について！」

珍しいものでも見るような感じで僕を囲んでいた女子生徒を先生はさっさと追い払って僕の体を教壇の上に引き寄せた。・・・・先ほどまで、教壇の上にいたのに、教室の真ん中まで引っ張られていたようだ。もしも、先生が僕を引っ張ってくれなかったら近くのト

イレに連れ込まれて襲われていたかもしれない・・・・。

「ええ、みんな、昨日言っておいたとおり、このクラスに転校生がやってきた。彼の名前は坂凪　驟雨君。みんな、私が予約したから触るんじゃないぞ？では、坂凪君、皆に何か言ってくれないかな？」

頷いて、教室をざっと見渡す。女女女女・・・・どこもかしこも女子だらけである。ああ、これってなんだか、幸せ？

「いや、男も一人いるよ。忘れないでくれ。」

・・・・・さて、何を言おうかと考えたが、特に思いつかないのでとりあえず、自己紹介から言ってみることにした。

「・・・えええと、坂凪驟雨です。昔の高校での思い出は特にないので・・・・できれば、こちらで多く作りたいと思っています。みなさん、よろしくお願いします！」

頭を下げて、頃合を見計らって頭を上げてみると、目の前に先生が立っていた。

「・・・・坂凪君、ぜひ、私と思い出を作ろう・・・・そして、後十年ぐらいしたらあんなことあったねぇとか言って一緒に笑おうじゃないか！！」

先生は同窓会の話をしているのだろうか？だが、なんとなく、違うような気もする・・・・。ここは頷かないほうがいいのかもしれない。

「先生なんかより、私たちと思いでつくろうよ！ま、特に私と一緒

が多いと思うからね。」

いつの間にか、先生は教壇においてある花瓶に咲いている花の葉っぱを掴んでおり、僕の手を他の女子が握っていた。・・・・う、うわ、初めて触ってもらったよ。意外とやわらかいもんだなぁ・・・・。

「みんな、抜け駆けを許しちゃ駄目よ！さっさと坂凪君を捕まえてみんなでいろいろなことして楽しみましょう！！」

誰かがそういうと、クラスのほとんどが賛同した。・・・・誰ですか、ロープまで取り出している危なそうな人は・・・・。いったい、ロープで何をしようって言うんですか？

「・・・・まぁ、とりあえずみんな、落ち着け。坂凪君が怯えているぞ？脅迫はよくない。」

そういって、皆を静めてくれたのはあの、男子生徒だった。・・・・どうやら、先生もなんだか叩かれたら痛そうなものをもって生徒側にまわっているみたいだ。

学校案内

十三、

僕の席は公平なくじ引きの結果・・・（女子生徒の一人がいかさましようとしたりもしたらしい。）そして、僕の席は廊下側の一番後ろの席である。前は、あの男子生徒で、右は、先ほどいかさまがばれた女子生徒であった。当然、周りからは批判の声が聞こえてくる。

「いかさまだぁ！！」

「いや、残念ながら公平なくじ引きの結果だよ？みんな、残念だったねぇ！」

うらやむ視線を撃墜しながら、今度は僕のほうに向かって笑顔を向けた。

「驟雨君、不束者だけど、よろしくね？」

「はぁ、よろしくお願いします。」

この子、普通に可愛いな・・・いや、このクラスの九十九パーセント（一人、男子を含んでいるのでこうなった。）は可愛い女の子たちだ。・・・なんだか、怖くなってきた。

「・・・・驟雨君？大丈夫？」

「うわぁ、だ、大丈夫です。」

考え事をしていたら、いつの間にか、隣の女の子の顔が目の前にあった。

「そう？大丈夫なら自己紹介させてもらうね？私の名前は、史跡（しせき）漣（さざなみ）。珍しい名前でしょ？」

「・・・ええ、凄い名前ですね？まぁ、僕の名前もかなり変でしょうけど・・・・。」

「驟雨君、ちなみに僕の名前は木佐模試（きざもし）　事件（じけん）という。ぜひとも、君の頭の中の電話帳にでも登録しておいてくれ。呼び方は事件で結構だ。できれば、フルネームでは呼ばないで欲しい。」

前の席の男子生徒は僕が隣のかわいい女子と話している最中に割り込んできやがった。・・・・くそ、あんたの顔は絶対に忘れん！！て、なんだか無理があるぞ、その名前・・・。

「よろしく、事件。」

僕は事件の右腕を掴んで笑った。事件のほうもにこりと笑うと、今度は僕の机の上に丈夫そうな黒色のかばんを置いた。・・・・なにやら、重要そうなものが入っていそうな雰囲気である。そして、漣さんに見ることができないように慎重に開ける。

「驟雨君、これを知っているかな？」

取り出されたのは一見すると、ただの美少女人形だ。

「こ、これは・・・・。」

しかし、この人形の価値を知っている奴にはわかる。これは、世界に数体しか存在しないといわれている人形の一体だ。何故、僕がそんなことを知っているかって？まぁ、それはおいおい話すとして、これは凄い・・・。

「・・・どうやら、この価値がわかるようだね？初めてだよ、これの価値がわかる人間に出会うのは・・・少なくとも、この学校の一年はこの人形の価値を知らないだろうからねぇ・・・。」

「・・・しかしまぁ、どうやって手に入れたんだい？その『ロリロリ魔法萌えっ子ながきちゃん　あっち向いてほいＶｅｒ．』。」

事件はにやりと笑って話し始めた。

「これはね、とある人物から仕事を頼まれたときに前払いとしてもらったものさ・・・。まぁ、この状態は珍しいからね・・・・売れる奴には一億ぐらいは出るだろうね・・・。」

その後、事件は大事そうにかばんを閉じてどこかに持っていった。そして僕は、先生に呼ばれて職員室に向かった。後からは、カメラ小僧ならぬ、カメラ少女が僕の後を気配を消してついてきている。ストーカー被害にあっている人の気持ちがなんとなく、理解できた気がする。

「・・・失礼します。」

僕は助けを求めるかのように担任の先生のもとに向かった。

「先生はさびしくてさびしくて、世界を滅ぼそうかと思ったぞ、坂凪君。」

「そんな大げさな・・・ところで、用事って何ですか？」

先生は頷き、僕に一枚の紙を渡した。それにはこの学校の教室の位置などが書かれており、どうやら、教室位置を覚えてもらうためのようなものであった。

「・・・坂凪君、君は昼休みに特別教室ぐらいは必ず回っておきなさい。迷子になりそうだと思うなら、誰かと一緒に行くことを私はお勧めするよ。・・・・放課後まで待ってくれれば私が案内するけど？」

先生にお願いしようと思ったら、いつの間にか、漣さんが僕の隣に立っていた。

「先生、私が案内しておきます。さ、いこっ、驟雨君？」

先生の片眉が危険を表すかのように急上昇・・・。うわ、先生が生徒を睨みつけてる・・・。

「・・・ち、私より後にあったくせして、名前で呼んでんのかよ・・・。漣の数学は今学期は一だな。」

そんなことを聞いた気がしたが、漣さんはお構いなしに僕の右腕を引っ張って職員室を出て行ったのであった。

「さ、まずは一番近くにある生物室から行ってみようか？」

「はい、お願いします。」

そして、僕は漣さんに引っ張られながら生物室に向かったのであった。

「・・・・さぁて、驟雨君とやらの力を見せてもらおうかな？まぁ、どうなるかはさすがの僕にも分からないけどね・・・。」

屋上にはそろそろ夏を告げる風が吹いていた。もう少しで一時間目が始まるというのに、この一年生は余裕を持って雲を眺めている。

「ま、これからどんなことが起きるのかはお楽しみにしておこうかな。」

生物室・・・そこには動物の模型が色々並んでいた。タスマニアデビルなんかの模型も飾っており、きちんと、人体模型もその群れの中に存在していた。

「・・・・ここはね、あまり使うことはない特別教室なんだよ？まぁ、掃除は毎日やっているから綺麗だけどね？」

「へぇ、すごいんですね。」

僕がそういうと、漣さんはにやりと笑っていった。

「・・・・実はね、この教室は夜に来るとお化けがうじゃうじゃいるって話なんだよぉ？ま、ここらの地域のホラースポットの隠れた名所ってところかな？」

つまり、お化け屋敷なのかもしれないな。

「さ、そろそろ教室に戻ろうか？授業が始まるよ？また、休み時間に色々教えてあげるからね？」

「親切にどうも。」

こんなことをしてもらったのは初めてなので一応、お礼を言うことにした。

「いいよ、だってこの高校には男子は驟雨君を含めて二人しかいないからね。ま、明日からは忙しくなると思うからね、がんばっていきましょう！！」

僕は背中をばしばし叩かれながらも生物室を後にした。

今のところ、僕の体に異変はないので、異常などは存在しないのだろう・・・・そして、これからどんなことが起きるかは分からない僕の体だが、きっと、どうにかなるだろう・・・・いや、なってもらわないと色々僕としては困る。こんないい学校に入ることができたのだ。実験体になろうとも、僕は絶対に幸せに生きてみせる！！・・・と、僕はとりあえず、生物室の看板になっている人体模型に宣言して見せたのであった。さてさて、これからどうなることやら？

事件が好きな女の子一

十四、ああ、潤しきあの人への想い・・・・

僕の名前は坂凪　驟雨と言う。

さまざまな事情により、高校に入ってすぐに転校となった。

まぁ、事情はさておいて、僕が転校していった高校には、僕としての天国が存在していた。これは嬉しい。そして、そんな高校生活も三日が過ぎ、同じ教室にいる近くにいる友達の名前は大体覚えた。・・・・名前、覚えるの少し遅いかな？そんなこんなで、僕は今、名前を覚えている数人の生徒と机をくっつけて話し合っている。

「・・・なるほど、信井（しい）　佐波（さなみ）さんは事件のことが好きなのか・・・・。」

「・・・は、はい！」

まぁ、数人って言っても、僕と漣さん、最後に話題となっている佐波さんだけなのだが・・・。発端は、今日の朝のホームルーム。氷さんが先にいっていてくれと僕に言ったので、学校に向かっていると、僕の席の前の事件とであった。というより、事件が後ろからすんごいスピードで僕を追い越していったのだ。僕があっけにとられていると、律儀な性格の彼は僕の元に戻ってきた。

「・・・やぁ、驟雨君、おはよう。」

「うん、おはよう、事件。・・・・なんか、慌ててるみたいだね？どうかしたの？」

「・・・いや、ちょっと学校に用事があってね、朝のマラソンつい

でに僕の体力のほとんどを使ってこうして急いでいるわけさ。じゃあね、驟雨君。」

そういって、事件はさっさと行ってしまった。

土煙がまって、通行人たちは事件のあまりの速さに回っている。・・・・と、ここにきて、まるでお尋ね者を追っかけているような表情で僕の隣を走っていった眼鏡をかけた少女を見る。近頃の流行は全速力で学校を目指すことらしい・・・・。しかし、どこからどう見ても運動が得意そうではない、彼女は僕の約一メートルのところで

ずしゃぁぁぁ！！

なんて音を立ててこけた。どうやら、道にはみ出ていたゴミ箱の箱につまずいてこけてしまったらしい・・・・。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ・・・だ、大丈夫です。」

眼鏡もついでに落ちたのか、見えない目であたりを探し始める。まるで、のび○を見ている気分になった。・・・・かわいそうである。一緒になって探してあげることにした。まぁ、実のところは何かの奇跡か、彼女の頭に眼鏡はくっついているのだが・・・・。

「・・・あの、眼鏡はあなたの頭の上にのってますよ？」

「え！！ああ！ありがとうございます、坂凪さん。」

ここにきて、この女子が僕のクラスの生徒だと気がついた。まぁ、いたって普通そうに見えるが、意外と可愛い顔をしている。胸もま

ぁまぁあるし・・・・はぁ、まずはそんなことより、友好を深めてみることにしよう。名前は確か・・・・。

「・・・信井　佐波さんでしたよね？」

「ええ、覚えていてくれて嬉しいですよ。・・・あの、坂凪さんは事件さんと仲がよろしいですよね？」

こうして、僕は彼女が入学したときから事件に想いを馳せていることを知った。

なんでも、この想いはアルバム百冊分に値するぐらいのものであり、山よりも高く、海よりも深く、その深さは地球の中心ぐらいまで到達する勢いだそうだ・・・・。まぁ、乙女心とやらを解読できない男の僕には到底、理解不能なことなのでとりあえず、漣さんに相談を持ちかけることとなった。それで、今に至る。

「・・・う～ん、好きならすきって言ってしまえばいいけれど、とりあえず、事件の好みを調べないとね・・・・。驟雨君、事件の好みを知ってるかな？」

事件の好み・・・・『萌』？いや、萌にも色々あるだろうから・・・・うぅむ、こまったものだ。ちょっと、調べる必要があるな。

「・・・まぁ、そんなにあせらないで少し、調べてみたらどうでしょうか？僕が今から事件を探して聞いておきます。ええと、知ることができたら連絡します。まぁ、あせってもいいことはないと思いますので、ここは冷静に行ったほうがいいんじゃないんでしょうか？」

僕が言ったことが正しいと判断したのだろう・・・・二人は頷い

て帰宅の準備をし始めた。さて、これから事件を探さないといけない。しかし、二人が教室を出たところで僕は生徒会室に行かなくてはいけなくなった。なぜなら、放送が入ってしまったからだ。

『坂凪　驟雨君、生徒会の方がお待ちです。至急、生徒会室まで飛んできてください。』

放送室にいるのは誰だったかなと考えながら、僕はかばんなどを持って生徒会室に向かった。どことなく、嫌な予感がする。何かしただろうか？

「・・・・驟雨君、私は君を非常に遺憾と思っている。分かるかね？」

生徒会室には憎しみと嫉妬と、ちょっとの切なさが混ざったオーラをまとっている生徒会長が奥の椅子にふんぞりかえっていた。他の生徒会メンバーは僕をなんだか恨めしそうな顔で見ている。

「・・・あの、何のことでしょうか？」

「・・・・ほぉ、しらばくれるきかね？柵木、写真を提出したまえ。」

まるで悲鳴のような返事をしながら柵木さんは数枚の写真を僕の前に提示した。そこには、登校中の僕と信井さんがいた。

「・・・・私は、先に行っていていいといったが・・・誰も、女と一緒に仲良く学校に行っていいと許したわけではないぞ？君たちを見たときの生徒会長としての自信を失われた。私としては、不純異性は良くないと思っている！全く、何を考えているんだ、驟雨君？」

どうやら、このオーラは僕が氷さんを置き去りにして、いい想いをしたのでうらめしやーといった感じなのだと理解した。うん、これは早く誤解を解かないと・・・・。と、ここでめちゃくちゃ迷惑そうに靱さんが僕を睨みつけた。

「・・・驟雨、いっぺん、おじいさんに会いにいってみるか？今頃、貴様のことを心配しているに違いない。それにな、貴様は生徒会メンバーではないからいいかもしれないが・・・・放課後からの緊急会議では、会長は狂ったのかと思ったぞ？貴様の命だけでは責任は取れないだろう・・・・。」

いつの間にか、靱さんは銃を右手に僕を見ている。・・・・な、なんだか知らないが、これはピンチだ。これは正直に全てをぶちまけるしかないっ！！

全てを綺麗さっぱり皆にぶちまけると、他のかたがたはふぅむと唸っていた。どうやら、氷さんの不機嫌オーラが消え去ったので気分をよくしたのだろう・・・もっとも、会長である、氷さんは僕が無実だと知ると、マイナスイオンを発生させ始めたのだが・・・。

「・・・成る程、あの事件にもとうとう、幸せがやってきたのか・・・。」

氷さんは窓の外を眺め、ほのぼのと語っている。そして、いきなり僕の手をとって力強く、握って宣言した。

「驟雨君、何か力になることはないか？私が何でも教えてやる！奴の好みから、どんな癖でも必ずな！」

その目には安堵の色が見えながらも、なんだか、生徒会長としての喜びがあるらしい・・・・。

とりあえず、僕は事件のことを教えてもらうこととした。

それを告げると、氷さんは右腕を高く上げ、指を鳴らした。その音を聞いたほかのメンバーは即時にそれぞれの行動を開始する。柵木さん、佐薙さんはどこからかパソコンを取り出し、起動させる。鎧王さんと靱さんはどこかに出て行ってしまった。氷さんは無線機を取り出して右腕に持つ。・・・・なんだろう、これは？

「佐薙、至急、木佐模試　事件を調べ上げろ！柵木、お前は他の二人に事件の居場所を調べ上げさせ、一週間、尾行させろ！！」

てきぱきと部下に指示を繰り出す、生徒会長。・・・やりすぎじゃないだろうか？

「あの、そこまでやらなくていいんじゃないんですか？」

「甘いぞ、驟雨君。恋というものは手加減なんてものは存在しないっ！！この手で勝利を掴むまで、私は倒れはしないのだ！！懸案事項となりそうなものはさっさと消化するに限る！！」

僕はなんだかとってもやる気を出している生徒会長に何を言っても無駄だと感じ、生徒会室を退出することにした。・・・・凄いね、ここの生徒会は・・・・。

事件が好きな女の子二

十五、貴方に捧げる、この想い・・・・

その日の夜、僕はこのことを他の二人に話すべきかどうか悩み、二人の連絡先を知らなかったのであきらめることにした。・・・・はぁ、これはちょっと、凄いこととなってきた。

一人で氷さんの部屋にいても暇なので外に出て、走ってこようなどと思っていると、氷さんが帰ってきた。手には数枚の書類が存在していた。その顔は、初陣に勝利した歩兵のような感じであった。

「驟雨君、今のところ順調だ。まぁ、今のところは鎧王と都竹から事件を見つけたという報告はないが・・・・あの二人のことだ、きっといい知らせを運んでくるに違いない。」

手渡された書類に目を通してみることにした。

そこには、個人情報がぎっしり詰まっているようにしか思えない内容が書かれていた。

まず、今までのテストなどは全て百点。

それ以外は存在しないという、完璧ぶりだ。

そして、とりあえず、格闘技などは全てこなせるらしく、免許皆伝と言ったところで、文武両道だ。顔も五段階中の五つ星・・・・。

性格も優しく、物静かで冷静沈着だが、間違ったことはあまり好きではないって感じだ。そして、事件の住所やその家の家計図まで乗っているとこまで見て、僕は書類から目をそらした。・・・・怖い、怖すぎる・・・・。

「・・・氷さん、この情報を調べるの大変でしたか？」

「いや、楽勝だ。なぁに、私たちが本気を出せばこんなことは旗揚

げゲームより簡単だよ。これが、私たちの組織の力だ。」

僕は僕の体の中に埋め込まれてしまった堕天使をつくった組織がどれだけ、凄いものか改めて実感した。僕が相手だったら、丸裸にされそうだ・・・。まぁ、なんにせよ、これでどうにかなるだろう。

夕食を終え、風呂に入り、明日の準備をし終え、僕はいつものように氷さんより先にベッドに入った。彼女に先を越されてしまっては・・・・何か、大変なことが起きる気がするのだ。ただ、これは僕の勝手な解釈なので、まだ、わからない。試してみればいいが、失敗したときのリスクが多い気がする。

そして、氷さんが僕の隣にやってきた。普段はフリフリドレスを着てくるのだが・・・今日は違った。ちらりとその姿を見てしまった僕は、あまりの珍しさに固まってしまった。

「・・・驟雨君、似合っているかな？」

そういう、氷さんの声はどこか、恥ずかしげだった。・・・・無理もない、彼女はTシャツ以外何も纏っていないのだ。大きめのサイズなので、助かった・・・・。何が助かったのだろうか？とりあえず、何でそんな格好をしているのか聞いてみることにした。

「・・・氷さん、何でそんな格好をしているんですか？」

「うむ、佐薙が色々試してみるといいといったのだ。・・・これ以上、変な連中が驟雨君にまとわりつかないように、その心を射止めるべきだと思ったのだ。それで、まずは形から言ってみるといいと佐薙に言われたのだ。」

つまり、佐薙さんが犯人か・・・。まぁ、僕としては素の姿で氷さんは美しいだろうし、ここまでする必要がない。性格も一直線だけど、知らないことは知ろうとする、柔軟な思考の持ち主だ。もっとも、その柔軟な考え方が今回、こんなことになった発端だろう。

「で、私に似合っているかな？ぜひ、今後の感想として教えて欲しい。」

「え・・・。」

言われて、僕は固まった。さて、どうしようか？制限時間は三十秒ぐらいだ。何故なら、氷さんは無言＝肯定と考えている人だからだ。

「ええ、大丈夫です。似合ってますよ。」

「そうか、それは良かった。それでは、隣、失礼するよ。」

広いベッドなのに、わざわざ僕のところまでやってきて、僕の腕にぴったりと張り付く。そして毎朝、目を覚ました僕は自分のパジャマが乱れてないか二度ぐらい確認することがなかば、習慣となってきた。

「・・・攻めるのもたまにはいいと思ったのだ。驟雨君、明日、ぜひとも信井さんとやらにあわせてもらいたい。」

氷さんが熱のこもったような感じでそんなことを言ってきたので僕はちょっと驚いたが、承諾した。まぁ、生徒会長が全体的にバックアップしているし、大丈夫だろう。

「・・・・ところで、氷さん。」

「なんだね、驟雨君？」

「その、ちょっと引っ付きすぎてませんか？」

そういった僕に、氷さんは罪悪感のない声でこう、答えた。

「・・・・・・気のせいだ。」

その少しの間はなんだろうと思っていたら、急に眠くなってその日の活動時間は終わりを迎えた。どうでもいいことだが、夢で、草食動物が寝ているところに肉食動物がやってきて襲いかかるというものを見た。これは何かの予知夢だろうか？

そして朝、僕は目の前にある氷さんの顔を見て少々、ぼーっとしていた。かわいいなと頭の中で三十回ぐらい繰り返して、今度は起きようとして体が思うように動かないことに気がついた。

「・・・・・。」

どうやら、氷さんに目の前から抱きしめられるようにして眠っているらしい・・・・。

ここにきて、凍結していた僕の脳みそに湯たんぽが支給された。

湯たんぽのおかげだろうか？僕の顔は真っ赤に染まった。

と、とりあえず・・・めくれ上がっているTシャツを何とかしないと・・・。手を動かせば、氷さんの体のさまざまなところにあたり、鼻血発射五秒前でどうにか、氷さんのTシャツを普通の状態に戻すことができた。危なかった。非常に危なかった・・・。先ほどまではほとんど聞こえなかった雨の音がやけにうるさく聞こえてくる。

「・・・・ん。朝か？」

そして、氷さんは間近にある僕の顔を一分ほど、じっくりと見ていた。そのとき僕は、氷さんの目を見るしかなかった。

「・・・驟雨君、おはよう。」

「え、ええ・・・おはようございます。今日もいい天気ですね？」

「雨が降ってるがね・・・。驟雨君、どうかしたのか？顔が真っ赤だぞ？もしかして・・・」

氷さんは顔を真っ青にして、急いで僕のおでこに自分の手をくっつけた。冷たくて、ひんやりとした感じの手だった。

「・・・熱はないみたいだ・・・驟雨君、どこか具合が悪いかね？」

「いえ、大丈夫です。ええと、そろそろおきませんか？」

氷さんは非常におかしい行動をとった。自然体のまま、僕から離れて着替えを始める。いつもだったら引っ付いたまま離れないのに・・・・。

「驟雨君、今度・・・一緒に何処かに行こうか？」

「え、ええ・・・わかりました。」

「じゃ、私は先に学校にいって彼女に報告しておこう・・・。」

そういってさっさと部屋を出て僕の前から居なくなってしまった。・・・・もしかしたら、明日も雨が降るかもしれない。

とりあえず、僕も急いで学校に行くとして・・・着替えをすることにした。そして、ベッドの中に手紙があるのに気がついた。その手紙は僕宛のもので・・・・氷さんからのものであった。

『驟雨君、今日の放課後・・・彼女が事件に告白すると私に連絡して来た。それで、彼女には色々と教えておいてもらいたい。健闘を祈る。』

さて、何を教えればいいのか僕にはさっぱりだ。重要なところを書いていないので何を教えたらいいのだろう・・・・。

しかし、そんな僕の考えをよそに・・・・彼女は本気だったらしい・・・・今日も朝から気合を入れてきたそうだ。

教室に入った僕はとりあえず、事件を監視しつつ・・・・机の中に手紙を入れる野を手伝った。なんだか、悪者になった気分・・・。

貴方に捧げるこの思い最後ぉぉ！！（前書き）

今回でラストです。

貴方に捧げるこの思い最後ぉぉ！！

十六、貴方に、伝えるこの想い・・・

僕は彼女と共に予行演習というものを始めた。念のためだ。

「さて、まずは・・・・告白のシーンからね？」

「は、はいっ！！し、驟雨君、大丈夫ですよね？」

信井さんはがちがちに緊張しており、大丈夫なのかと僕のほうが聞きたい。ま、まぁ・・・どうにでもなってしまえばいいだろう。いや、これじゃちょっと無責任かな？

「とりあえず、何か気の聞く台詞を言ってみたら？」

「はいっ！！どうか、貴方の目覚ましに私を任命してください！！」

うーん、ちょっと違うかな・・・。

「次。」

「貴方の・・・バキューン（自主規制）を私の・・」

「ストップ！！それはやばい！！いろんな意味でストレートすぎ！！」

「そ、そうですか・・・？」

僕としては一度でもいいから言われてみたい台詞だな。ま、まぁ・

・・今回は残念だとしても、いつかはそんな女の子と出会いたいものだなぁ。
僕が一人で妄想にふけっていると、氷さんがやってきた。
「驟雨君、事件が来るぞ？」
場所は屋上なので、そろそろ何処かに隠れないと僕たちが居ることがばれてしまう。僕と氷さんは慌てて屋上の一つにおいてある謎のボックスのところへと避難する。その裏には他の生徒会メンバーが隠れていた。
「遅いですよ。」
「ごめん。」
「ほら、きたっ！皆静かにね？」
僕たちが見ているところへと事件がやってきた。そして、その前に信井さんが一歩を踏み出す。
「うぅむ、的確な指示を出すために通信機でも持ってくればよかったな。」
いや、それは流石にやりすぎではないのでしょうかと僕は考えたが、既に他のメンバーはそんな生徒会長の事など放っておいており、二人のほうへと視線を固定。
「お、信井さんがとうとう愛の告白をしたぞ！！」
僕は内心、変なことを口走っていませんようにと思いながらその

光景を見ていた。ま、まぁ・・・・彼女の事だから大丈夫だろうとは思う。先程ちゃんと指導はしておいたし、間違いは訂正させたし・・・。

「あ、事件が返事をしたわ！！」

事件に何をいわれたのか知らないが、信井さんは首を縦に動かしたのであった。そして、事件は屋上から姿を消した。

「よし、皆・・・返事を聞いてくるか！」

生徒会長を無視して僕以外のものたちは既に彼女の元へと駆け寄って行ったのであった。僕はいじけてしまった氷さんを立たせて信井さんの元へと向かう。

「信井さん、どうでした？」

「あ、あのね・・・ちょっとまっててくれって。そんなことを言われてもいきなりの事でびっくりしているからだって言ってた。できれば、色々な人に話しておきたいっても言ってたなぁ。」

まぁ、今回は手ごたえありって感じかな？僕としてはもっと違うことが聞きたいのだけどね。

「信井さん、因みになんて言ったの？」

僕の質問に信井さんはふと考えるような仕草を見せて答えた。その答えを聞いて、その場に居た全員が固まった。

「えっとね、一緒に死んでくださいって言ったの。ほら、日本の映

画とかでよく言うじゃないですか？」

「・・・・それ、一緒に死んでくださいじゃなくて、一緒のお墓に入ってくださいじゃないかな？」

信井さんには悪いが、多分、ふられるに違いない。絶対に、この場の全員がそう思っているだろうと僕は思った。

その日の放課後、僕は公園で氷さんと一緒にブランコをこいでいた。

「返事、どうなるでしょうね？」

「まぁ、はっきりしていると思うがね。驟雨君、君はどう思う？」

「多分、ふられると思います。」

「そうだろうな・・・。」

なんだか、切ない気持ちになりながらも・・・今の心境を他人に伝えるなら、こうなる。自分の目の前にあるケーキが実は蝋よりも食べられないであろう、物体だったときみたいだ。

「驟雨君は女の子にそんなことを言われたときはどうする？」

「僕だったら・・・事件と同じようにするかもしれません。」

「ふふ、そうか・・・・。」

氷さんが何故、笑ったのかは僕には分からない。だが、なんだかとってもうれしそうだったのでよしとしておこう・・・・。

僕たちから、少し離れている場所で・・・一人の少女が立っていた。右手には魔女っこが持ってそうな杖を持っている

「あ～あ、魔王様から怒られちゃったよ。まさか、送り込む世界が違ってたなんてなぁ。ま、今から襲えばなんとかなるっしょ？」

彼女は右腕を高らかに掲げた後、何かをぶつぶつと呟く。

そして、その右腕はまっすぐに僕に向けられていたらしい・・・・・見事、その攻撃がヒットした僕は意識を失った。なんだ、このちゅーとはんぱなおわりかたはぁ！！～終～

後日談

事件に告白した信井さんはやはりと言うか、なんというか、ふられてしまった。その後、事件は他の高校へと転校までしてしまったそうだ。

「うう、ふられてしまいました。」

「ま、まぁ・・・男は星の数ほど居るんだし、もっといい男を捜しなよ。」

「・・・・そうですね。」

そして、僕のことだが・・・・綺麗さっぱり、忘れ去られてしまっている。何故かって？そんなことは知らないが、一つだけ、確かに僕がこの世界に居たことを確認させるものが存在している。

「なぁ、氷君・・・あのサンプルの入った薬はどこに行ったか知らないかね？」

「知りません。教授が何処かにしまったのではないんですか？全く、教授はいつもいつもそうやっていつもなくしますからね。あんな貴重で危険なものをなくすなんておかしいですよ。」

「そ、そうか・・・どこにやったかなぁ？」

そう、あの薬は僕の体内の中に入っているので、それだけは変わらず、そのまんまだ。

今後、どのようなことが起ころうとするのかわからないが、できれば、穏便にことは進めてもらいたい。いやぁ、意外と心臓が悪いんで・・・・。まぁ、そんなこんなで僕は無理やりに新たな世界を放り出されてしまい、前と同じ世界に戻れるのかと無意識的に思っていたが、甘かった。僕は、驟雨のままで更なる場所へと飛ばされてしまうのであった・・・・・。

貴方に捧げるこの思い最後ぉぉ！！（後書き）

さて、これから先はどうなるかさっぱりわかりませんが・・これまで読んでくれていた皆様に感謝の心を伝えたいと思います。皆様、いままでよんでくれてありがとうございました！今後共々、これからの作品にもご期待ください！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2608b/

アンノウン・エンジェル ～if～

2010年10月29日12時50分発行